

---

# バックイングプレイング

中陳 稔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バッキングプレイング

### 【Nコード】

N5000E

### 【作者名】

中陳 秤

### 【あらすじ】

探偵事務所「道楽遊戯」にまたしても依頼が飛び込んできた。その依頼の時間的矛盾に悩む中道と楽座。依頼人に翻弄されていく中で七年の時を遡るまでに発展する。「道楽遊戯」シリーズの第二弾。  
(2009年4月27日改題) 【推奨：PDF】

第一話・プロローグの序曲（前書き）

プロローグ【Prologue】

・口上

## 第一話：プロローグの序曲

某県某市に「琴原駅ことばら」という駅がある。出入り口は一つしかない。その駅から出て市役所のほうを目指して歩いて行く。緑の美しい街路樹が日の光を心地よく遮るおさえぎ。車通りは多くもなく少なくもなく走り、路線バスも走っている。

「琴原駅」から歩いて約十分。新しいビルに挟まれて相当年期の入ったビルが見えてくる。所々に罅割れひびとシミがあり、ビルの看板は一文字だけ欠落してかつてそこに何の文字が掲げてあったのかわかるような痕あとがついている。このビル「傘倉ビルかまくら」（一文字欠落しているから「傘ビル」と呼ばれている）は四階建て。ビルの入り口を入るとすぐにコンクリートの階段が目に入る。やはり、階段も所々に細い罅割れがある。上り始めたら崩れるんじゃないかなと思えるほどだ。

その階段を三階まで上り、すぐ左に折れる。すると、ビルと相まってポロポロな鉄製のドアがある。以前入っていた業者の看板が何度も付けられては、剥はがされているようで、接着剤の痕や無理矢理剥がした時に出来たと思われる塗装のがれが目についた。そんなドアには「道楽遊戯」というプラスチック製の看板が貼つてある。

「道楽遊戯」……一見すると、何の事務所かわからない。

事務所内は中央に黒い長椅子が二つあり、それに挟まれて天板がガラスで出来ているテーブルが置いてある。

窓の方に目をやると、机が向かい合わせにおいてある。だが、その机の様子は両極端。片方は書類がちゃんと整理されており、髪の毛も埃も落ちていないほどにきれいなのだが、片方が書類は乱雑に置かれ、パソコンのキーボードも押せないほどに書類やボールペンが置いてあり物凄く汚い。

綺麗な机に一人の青年が座っている。髪が肩に掛かるほど長く、若干茶色い。顔は幼い少年のような青年で、黄色いTシャツに黄色

いハーフパンツと全身黄色で固めている。一見すると中学生にも見えるが、これでも十九歳である。名を楽座陽太郎らくざ とうたろうと言う。

一方、汚い机にも一人の女性が座っている。髪は背中に掛かるほど長く黒い。目はキリツとしていて、鼻は小さい。黒い口紅を塗った唇が輝いている。黒いキャミソールに黒いショートパンツを履き、青年と同じように同じ色で全身を固めている。一見すると、二十代前半に見えるが、ビンゴ。彼女は二十四歳である。名を中道凛なかみちりんと言う。

中道は自分の机に座り、手紙に目を通していた。その傍らにはその手紙が入っていた封筒が落ちていた。封筒には綺麗な字でこの事務所の住所と、その下に「道楽遊戯様」と書かれている。片隅には小さな字で「伺去祐依しやうゆい」と書かれている。

「本当に出るんですかね……誘拐犯」

丁寧な口調で楽座が書類の整理をしながら、呟つぶやくかのようにつづら

「さあな。でも、困ってる人がいんだからよ。現れる事を前提でこの問題に掛かってくしかねえだろ」

楽座とは反対に、少々乱暴な言葉で手紙を見ながら反応する中道だが、その手紙のとある一説の部分で妙に引っかかっている様子だった。

「さつきから同じ場所ばかり読んでますね」

楽座が上目遣いで中道を見ながら言う。

「なんか、引つ掛かんだよな」

中道は頭を掻かきながら、手紙を読んでいる。

「陽ちゃん、ちょっとこれ読んでみ」

あまりに納得がいけないようで、中道は楽座に白い手紙を手渡した。その手紙には綺麗な字で「相談事」が長々と綴られている。

「何処ですか？」

「上から七行目ぐらいのところを読んでみな」

中道に指示されて、楽座はその手紙の上から七行目を読んでみる。

「『四月十二日火曜日の午後五時十一分に貴女を攫さらいに行きます』と書かれた手紙が送られてきたんです……？　四月十二日？」

「今日は六月十二日だよな？」

「曜日や時間まで細かく書いてあるくせに、日にちはもう過ぎちゃってますね」

「そこなんだよ……依頼人を疑うたぐるのはあたしの信念に反するんだけどよ、ここまで時間が過ぎていることを今更になって相談するってのは、どういうことなんだ？」

「来年の四月十二日ってことは有り得ませんか？」

「来年って、まだ随分先のことじゃねえか。くそつ、依頼人に会う前にちゃんと手紙に目を通しておくんだった。そうすればその事について聞けたのにな」

中道はチツと舌打ちをし、椅子の背もたれにもたれた。ギシギシと軋きしむ音がする。頭の後ろで手を組んでぼーっと窓から入ってくる風に靡なびくカーテンを見ている。

「……四月十二日……火曜日……」

中道はポツリと呟くと、ハツとカレンダーを見た。天井に届きそうな大きい本棚の隣に備え付けられた簡単な棚。その他の天板にはテレビがドカツと居座っている。そのテレビの上の壁に、この事務所の上　つまり、四階に入っている会計事務所が去年末にくれたカレンダー（もちろん、会計事務所の名前入り）が貼ってある。一枚に二月分が載っているカレンダーで、今は五月と六月が出ている。五、六月のカレンダーの上に小さい文字で三、四月のカレンダーが書いてある。

中道は前のめりになって、カレンダーを見た。中道の席からカレンダーは約六メートル半離れている。事務所の面積は七メートル×十三メートルで中道の後ろの壁からカレンダーの貼ってある壁まで七メートルある。三、四月のカレンダーの文字は一文字につき一センチメートル×一センチメートル。常人並みと言えそうだが……。

「木曜日か……」

確認し終えた中道は再び背もたれにもたれる。

「木曜日!？」

中道はハツとしてもう一度カレンダーを確認した。確かに四月十二日は木曜日になっている。

「陽ちゃん、来年の四月十二日は何曜日だ？」

「えーと、ちよつと待って下さいね……」

楽座はカタカタとパソコンを打ち始めた。カタカタと言う音以外、窓から入ってくる風の音しか聞こえない。

「来年の四月十二日は金曜日です」

「金曜日だと……？ 四月十二日が火曜日だったのは何時だ？」

再びカタカタとパソコンを打ち始める楽座。

「閏年うるしうねんなども考えて計算すると、四年後の四月十二日は火曜日ですね」

「四年後……？ 伺去さんは未来予測者か？」

「いえ、それは無いと思いますが」

「あ、伺去さんがじゃねえや。誘拐犯が未来予測者だ」

「いえ、それも無いと思います」

中道の予想にやたらと否定的な楽座。

「冗談だよ……んなわけねえだろ」

チツと舌打ちをして中道は言う。そして、「まったく、冗談も通じねえのかこの子は……」と心の中で呆あきれた。

「この間の事件みたい、依頼人が俺たちを騙してるって訳じゃ……」

楽座はポツリと呟いた。その言葉に中道はキツと楽座を睨にらみつける。

「あ、すみません……」

慌あわてて楽座は謝る。が、

「いや、案外そうかもしれないな。前回のに比べりゃ随分ずいぶんとあからさまな嘘だがな」

中道はすくつと自分の席から立ち、後ろの窓から外を眺める。

空は青く澄み渡り、雲がゆっくりと流れている。風は心地よく吹き、小鳥は可愛らしく唄う。ビルから少し離れたところにある高校のグラウンドで、部活動をしている生徒達の威勢のいい掛け声が微かに聞こえる。今、自分たちが抱えている問題とは全く正反対の風景と音が中道に飛び込んでくる。

「はあ……………」

中道は深い溜息ためいきをついた。中道が溜息を吐いたのを初めて見た楽座は、ただ中道の背中を見るしかなかった。

「しょうがねえ、依頼人に会ってくつか」

「あ、中道さん？」

中道が出かける準備をするため動き出そうとしたとき、楽座が中道を止めた。

「何だ？」

「あ、いえ。依頼人の自宅の住所は分かっちゃるんですか？」

「うわあ、ここでボケかます？ かましちゃうの陽ちゃん？」

楽座は中道にそういわれ、キョトンとする。

「はい。手紙には何を書かなきゃいけないんだっけかな？」

「えつと……………送付先の住所と名前、郵便番号と……………差出人の住所と

……………あ」

楽座の頭に「！」マークが見えた。

「アホか、おめえは」

「あ。いた……………あれ？」

頭を叩かれた表紙に手紙に目がいく楽座。何か書いてあることに気付いた。

「中道さん。行かなくてもいいんじゃないですか？」

「あ？」

楽座は手紙を手に取り、中道に見せた。

「『六月十五日にお尋ねします』って書いてありますよ？」

「あ……………」

その日、楽座は中道が頭を下げ謝っている姿を初めて見たとい





第一話：プロローグの序曲（後書き）

2009年3月22日

「イントロダクションの序章」から改題。

第二話・リフレッシュングの転換(前書き)

リフレッシュング【Refreshingly】

・清涼

## 第二話：リフレッシュングの転換

いきなり八方を壁に塞がれてしまった中道と楽座は困り果てていた。今までの依頼ではなかったタイムパラドックスと初歩的なミスが重なってしまったがために、捜査や推理に困難が生じてしまったのだ。

「あゝ。どうすっかな〜」

中道は頭の後ろに手を組んで椅子の背もたれにもたれ掛かっている。リップクリームを塗ったときののように、上唇と下唇を擦り合わせるような動作を取りながら、深く考えているようだった。机に置いてあるコカ・コーラZEROを手に取り、一口飲んだ。「ふう」と溜息を一回吐くと、コーラの缶を机に置き、頭の後ろで手を組んで考え始めた。

「伺去さんとの会話を思い出して、糸を紡ぎ出すしかないようですね」

楽座は伺去から送られてきた手紙を机の上に置き、先ほど給湯室の冷蔵庫から取ってきたエネルギーを一口飲んでから静かに言う。

「伺去祐依さん。十九歳、望清大学に通う大学生。十日前に差出人不明の封筒がアパートの自分の部屋に届いた。中をあけてみると、定規で一本一本引きながら書いたような線で『四月十二日火曜日の午後五時十一分に貴女を攫いに行きます』と書いてあった……」

「そんな程度でしたよね。後は彼女黙りこくっちゃいましたし。そうとう恐がってましたね」

「そりゃあ、なあ。差出人も分からねえ封筒が急に届いたんだ。恐くなるのもムリねえだろ」

「でも、いきなり問題が」

「ああ、タイムパラドックス（時間的矛盾）という奴だ」

「未来のことを予想したわけでもないですしね」

「仮にそうだったとしても、誘拐犯が覚えているかどうかだろ。何し

る四年後のことだぞ？」

「どんなに計画を練ったとしても、その計画自体を忘れていてしまうね。そんなに時間が経ってしまったら」

「それに、覚えていたとしても、もうやる気がねえだろ。四年越しに攫ってどうすんだ？」

「四年の間に彼女が海外に行ったりしている可能性もありますからね。確実に攫えるという保証もないですし」

中道と楽座は「うん」と唸った。あまりに意味の分からない手紙の内容とあまり喋らなかつた何去の話を照らし合わせてみても、全く道が開けていないのだ。仮に何去が事細かに話したとしても、実際に何去の元に送られてきた手紙の内容の意味は解読できない。まさに八方塞……。

「そつだ」

……とも言い切れないようだ。中道が思い出したかのように言った。

「どうしたんですか？ 中道さん」

「大学だよ。彼女の言ってる大学……なんで、早く気づかなかつたんだ？ そこに行ってみれば彼女に会えるかも知れねえだろ？」

「ああ、望清大学ですね……ん？ 望清大学？」

「どうした？」

顔が段々青ざめていく楽座を見て、中道が少し心配そうに声をかけた。

「望清大学……あの『アパート』の近くにある大学ですよね？」

「『アパート』？」

「『白波荘』ですよ……」

「白波荘」 中道と楽座がついこの間、関わったばかりの事件が起こったアパートで、過去に殺人事件が二件……いや、あの事件を含めると三件起きているという曰く付きのアパート。その「白波荘」の近くに「望清大学」という文科系の大学がある。最寄り駅の「久佐木駅」から歩いて二十分と少し遠いが、周りを緑が囲ん

でいてとても環境が良く、有名な文豪も輩出しているという、立てられて八十一年以上経っている名門中の名門と言われる大学である。同去はその大学の学生だと言う。

「今回はあの『アパート』は関係ないだろ。大学に用があんだからよ……まさか、陽ちゃん、お化けが恐いんじゃないだろうな？」

長い髪をわざと顔に被らせ、手をだらりと垂れ、いかにも幽霊と言わんばかりの仕草をした中道が楽座をからかうように言う。

「そ、そんなこと……ある訳ないじゃないですか」

と少し声を震わせて楽座が言う。強がっているようだが、実際のところ凶星のようだ。

「じゃあ、今度夜に『白波荘』に行くか？」

と中道がニヤリと笑って言う。

「え、遠慮しておきます」

と楽座は弱く答えた。今にも泣きそうな雰囲気がある。

「冗談だよ……そんな顔すんなって」

泣きそうな楽座に慌てながら言う中道。ちよつとからかいが過ぎたようだ。

「……さて、行くか」

気を取り直して中道が椅子から立ち上がる。その言葉に楽座の体がビクツとなる。

「『白波荘』じゃねえよ。『望清大学』だつつの」

中道はニヤリと笑って楽座に言う。その言葉を聞いて、楽座はほつとしたような溜息を吐いた。

中道は黒いリュックを楽座は黄色いリュックを背負い「道楽遊戯」のドアを開けた。ギイーといかにも年期が入っているような軋む音がしてドアが開く。ドアを押さえながら二人が外に出た。楽座が押さえていたドアから手を離すと、再びギイーと音がしてドアが閉ま………らなかった。楽座が強くドアを押しドアを完全に閉める。中道がドアノブにある鍵穴に鍵を挿し、鍵を閉めた。

「さて、行くか」

中道の手には事務所の鍵とは別にもう一つ鍵が握られていた。

「ええ、初めてじゃないですか？ 原付で行くの」

と楽座が言う。その楽座の手にも鍵が握られている。二人の持っている鍵は原付の鍵だった。二人は原付の鍵をちゃらちゃらと鳴らしながら、ゆっくりと階段を下りていった。

今まで、県内の移動は徒歩か奔りか電車を駆使していた。以前あったあの事件でその方法は依頼遂行に対する一種の妨げになると中道が判断し、以降、原付で行動することになっている。中道は普通免許を持っているが敢えて原付で移動することになっている。理由は「細い道でも早く行けるし、意外と燃費がよく遠くまでいけるから」だそうだ。

ボロビル 「傘ビル」の入り口付近は少々開けており、車一台ほど置けるスペースがある。だが、ここには車を置いてはいけないうと言いつ決まりになっており、「傘ビル」から歩いて三分ほどのところにある駐車場へ車を置くように言われている。ただし、原付に関してはビル前に止めても良いそうだ。

その「傘ビル」の空いているスペースの端の方に、二台の原付が身を寄せ合うようにしておいてある。片方は黄色い「ZOOMER」。もう一台は黒い「MAGNA50」。もうお分かりかもしれないが、「ZOOMER」は楽座の原付（毎日この原付に乗って「道楽遊戯」まで通っている）で、「MAGNA50」は中道の原付（中道は毎日、自宅からBMWの黒い「Z4 ロードスター」に乗って通っている）だ。

二人は原付のハンドルロックを解除し、ハンドルに掛かっていたヘルメットを取って、キーを差し込み電源を入れた。ハンドルについているスイッチを押し、エンジンをスタートさせた。キャリリリと言う音がし、エンジンが回り始める。スタンドを外し、ハンドルを制御しながら原付を移動させ、道路側に原付を向けた。シートに跨りヘルメットを被った。ヘルメットの色も統一感があり、楽座は

黄色、中道は黒いヘルメットだった。

左右を確認した後、中道と楽座の原付は右へと曲がり市役所の方へと走り始めた。

一つ目の信号を左へと曲がり、住宅街へと入っていく。後はまっすぐ進むだけ。右左折はしない。そうすれば、二十五分ほどで久佐木駅前交差点にたどり着く。その久佐木駅前交差点の右側角に「望清大学」の看板が立てかけられており、「右折後1キロ先」と書いてある。その下には右方向への矢印が書いてある。

交差点右折後、すぐに例の「白波荘」が見え、それを過ぎ去りしばらく行くと、突き当たりに大きくて荘厳な白い建物が見えてきた。その建物こそ「望清大学」である。その大学を取り囲むかのように桜や銀杏いちじょうの木が植えられている。緑に囲まれた大学である。

中道と楽座はバイクに乗ったまま、開け放たれた鉄製の大きな門に入る。目の前にはヨーロッパ調の彫刻が鎮座ちんざしている。その下には噴水があり絶えず水が噴出している。道は煉瓦レンガが敷き詰められている。

全体的にヨーロッパ（何処とは断定できない）の雰囲気があり、ここが日本であることを感じさせる余地はなかった。中道はまるで敷地内を熟視しているかのように、ヨーロッパ調の雰囲気の中をスイスイと奔って行く。

「中道さん！」

楽座が後ろから大きな声で中道を呼ぶ。

「ん？ 何だ？」

原付を運転しながら中道が楽座の呼びかけに反応する。

「随分とこの大学の敷地に詳しくそうですね、以前にも来た事あるんですか？」

「ああ、陽ちゃんには言っただけか？」

と中道が意味深なことを言う。

「あ、ここに通ってたんだよ」

「ええ！？ ここって名門校じゃないですか！」



「あたしがここに通ってたのがそんなに不思議か？」  
「いえ……」

楽座は今まで中道の生い立ちを聞いたことがなかった。以前、チラツと聞いたことがあったのは、中道の祖父に当たる人物が有名な企業の創設者であり、中道はその家系のお嬢様として大切に育てられたということだけだった。だから、BMWの「ロードスター」を若干二十四歳の中道が所有し、乗り回すことが出来ているのである。この「望清大学」も名門校として知られているほか、お嬢様大学としても有名であった。中道もこの大学の卒業生であるが、今回の依頼人、伺去もこの大学に在籍していると言う。伺去の話によれば大学二年生だそうだ。

噴水の脇を通り、校舎の方へと向かうと突如として右側に駐輪場が見えてきた。中道がその駐輪場に原付を止めるのを見て、楽座も続いて原付を止めた。スタンドをして鍵をOFFの方にひねる。すると、エンジンが止まり静かになった。

やはり、駐輪場も駐輪場らしくないどこか、高貴な感じがする。白を基調とした柱に白い石膏像のようなものが取り付けられていた。怒り顔の髭を生やした老人の像が楽座を睨んでいるかのように取り付けられている。

「お、ジョンおじさん。まだ付いてたのか」

中道はその老人の像をニヤリと笑いながらペチペチ叩いて言う。

「ジョン、ジョンおじさん？」

「ああ、あたし達が付けたんだよ。実際の名前は誰にも分かんねえからな。もしかしたら、本当に『ジョン』って名前なんかもしんねえけどな」

ケタケタ笑いながら、駐輪場から離れていく。

「久しぶりだなあ。二年ぶりってどこか」

中道は白い校舎を見て、どこか懐かしそうに言った。

## 第二話：リフレッシングの転換（後書き）

### 【参考資料】

本文中に登場した、バイクや自動車は以下のサイトを参考にしました。

HONDA ZOOMER

<http://www.honda.co.jp/motor-1>

<http://zoomer/>

HONDA MAGNA50

<http://www.honda.co.jp/motor-1>

<http://magna50/>

BMW Z4 ロードスター

<http://www.bmw.co.jp/jp/ja/new>

<http://www.bmw.co.jp/jp/ja/new>

<http://www.bmw.co.jp/jp/ja/new>

<http://www.bmw.co.jp/jp/ja/new>

### 第三話：パラドックスの逆説（前書き）

パラドックス【Paradox】

・逆説

・矛盾

### 第三話：パラドックスの逆説

今、中道と楽座の目の前にあるのは「望清大学」の何にも犯されていない処女のような真つ白で汚れない白い壁を身に纏う、清楚な大学の校舎と道化師のような嘲笑が聞こえてくるような目には見えないタイムパラドックスの壁だった。

中道と楽座は駐輪場に原付を置き、煉瓦の敷き詰められた地面を踏みしめながら校舎の入り口の前に来ていた。入り口のドアは閉ざされており、燻したような暗い茶色と二スの照かりを持った、中道と楽座の背を軽く越す、二メートルはあるう大きな門のような観音開きのドアがある。中道と楽座の居る方　つまり、外側に開かれたドア。あけるのが大変そうなほどに重そうなずっしりとした雰囲気がある。何故、これほどまでに大きいのか。学生が何人かいないと開けられなさそうだ。

「大きなドア……開けるの大変そうですね」

「なあに、あたしは片手で開けられるぜ」

中道はおもむろに左側のドアのノブを左手で掴んだ。しかし、そのドアノブも異様に大きい。ドアノブは中道の手には収まりきれていないほどだ。中道の手は大きくもなく小さくもない。指は長いが手の全体的な大きさは一般成人女性と何ら変わらない。

中道は足を肩幅ほどに開き、膝は少し曲げている。組体操の「サポテン」の土台役のそれに近い形。

「ふっ!!!」

と短く息を吐くように中道は気合を入れ、ドアノブをひねり、腕に力を入れて引っ張った。

ゴゴゴゴゴと地響きの音がする。ドアの軋む音。馬鹿でかいドアは少しずつではあるが開き始めている。それを見て啞然としている楽座。もはや言葉は出ない。

ゆっくりと開くドアの向こうに広い真つ白なエントランスが見え

てきた。壁も床も白い。床はおそらく白い大理石だろう。常に磨かれているのか光沢が出ている。天井にはシャンデリアが掛かっているのが分かるくらいに、鏡同然となっているのだ。

中道は楽座よりだいぶ後ろに居た。まだドアを引いているのだ。どうやら全開にしたらしい。ドアは大人一人平気で通れるほどまで開いている。楽座は啞然としながら「遅れてきた奴は何処から入っているんだろう」と内心思っていた。その答えはすぐに出た。今回の事件もこれだけ早く出てしまうと、話が盛り上がらなくなるくらいに短い時間で。

突然。

「おいおい……自動ドアを引つ張って何やってんだ？」

と後ろから低い声が聞こえた。授業中にずっと聴いていたら眠くなりそうな重低音。楽座は吃驚して思わず後ろを振り向いた。中道もその声に反応して、ドアを引くのを止めてピタリと止まった。そして、後ろを振り向く。

そこには背の高い　ドアとほぼ同じくらいの身長 of 三十代後半くらいで無精髭を生やし、髪を後ろで縛り、白衣を着た男性が右脇に分厚い辞書のような本を抱えて立っていた。その顔は無表情であるが若干険しい。

「あれ？　中道か？」

男性は中道の顔を見るなり、急に顔が明るくなった。声は依然として低いままだが……。

「おつ、誰かと思ったら式部じゃねえか」

中道も男性の顔を見てニヤリと笑う。式部と呼ばれた男性は左手で頭を掻いた。

「せめて、『先生』ぐらい付けてくれよ。一応、ここの先公なんだからよ」

と中道に言う。そして、楽座を見て。

「これ、お前の彼氏か？」

とニヤリと笑って言う。そのニヤリと笑う様はどこか中道に似て

いる。

「違えよ。こいつはあたしの奴隷だ」

とやはりニヤリと笑って答える中道。楽座の顔が俄かに愕然としている。「俺って奴隷だったんだ」という驚きとシヨックが混じった顔。

「あつはつはつはつは。奴隷か。そいつは面白えじゃねえか」と爆笑して式部は楽座の頭をポンポンと叩く。

「君も大変だな。こんな奴の奴隷になっちまうなんて」

と笑いながら式部は言った。楽座はその言葉に反論したかったが何も言えなかった。

「こんな奴たあ、どういう意味だ。式部」

「お前、昔から変わってねえな。ズボラっつーか、乱暴っつーか、野蠻っつーか」

「これはあたしの性分だ。今更変えられねえもんでね」

「はつはつはつはつは。そいつは面白えな」

笑い方が豪快な式部はごそそと白衣のポケットを弄り、ポケットから一枚のカードを取り出した。

「お前が卒業した後にな、このドアは自動になったんだよ」

と式部は青いカードをひらひらさせて言う。それは定期券ぐらいのサイズで、中央に「シキベハルカ」と書いてあり、その右隣に式部の顔写真が貼られている。カードの上側には細い黒い帯が左から右へ引かれている。

「自動ドアあ？」

中道はドアノブから手を離し、式部の持っているカードを食い入るよっに見た。

「どう使うんだよ？」

と中道は式部に問う。式部は中道の言葉に顔をニヤリとさせ、中道の左側へと回った。そして、指を指して、

「あそこにカードリーダーがあるんだ」

と言って、カードリーダーの方へと向かう。カードリーダーは何

てことない灰色のただの箱のようであるが、箱の中心にカードの厚さと同じぐらいの細い穴が開いている。カードの横の長さと同致する。式部はそのカードリーダーに自分の持っているカードを差し込んだ。すると、

ギギギギギ。

とドアの軋む音がして、ゆっくりではあるがドアが開いていく。

中道が中途半端に開けた左側のドアも、完全に閉まっていた右側のドアも開いていく。

「おお」

と中道は開いていくドアを見て、感心した顔と声を表した。

「便利になったもんだな、この学校も」

中道は笑いながら開いていくドアをバンバン叩いて言う。

「お前が卒業してからだから……二年か。二年で、自動化だぞ？」

お前が馬鹿力でドアを壊してから教員教授会議で提案が出されてたんだ」

と式部はニヤリと笑って言う。

その言葉に中道はギクツとしたあと、睨みながら式部を見た。それをを見て、

「お前が悪い」

と式部は中道の心情を読み取ったかのように制した。

ドアが完全に開くと、中道、楽座、式部の三人はエントランスへと入った。入って初めて気づいたが、エントランスには下駄箱がずらりと整列されて置いてあった。と言うのも、床と壁が真っ白だったために気付かなかったのだ。そう、下駄箱までもが真っ白なのだ。何処まで白を基調とすれば気が済むのだろう。大学の創設者は余程の白好きであることが……中道も楽座も人の事を言えたものではない。中道は全身を真っ黒で決め、楽座は全身を黄色で決めているからだ。

中に入ると、式部は左に折れる。左側には教員教授用の下駄箱と

来賓用の下駄箱が置いてある。中道と楽座は靴を脱ぎ、真っ白い下駄箱の戸を開けた。縦四段、横十二列の結構大きめの下駄箱で、一つ一つの下足入れには蓋がちゃんと付いている。コインロッカーのように鍵まで付いている。靴を下駄箱に入れ、中に入っている金字で「来賓用」と書いてある茶色いスリッパを取り出し、履いた。

式部は式部で自分の下駄箱に行き。革靴をいれ、使い古したボロボロのサンダルを取り出して履いた。

「んで、お前から何しに来た？」

式部がスリッパを履き終えた中道と楽座のほうを見て聞く。何故か、その顔は若干眠そうだ。いや、いかにもやる気のなさそうな顔だ。

「あ、いや。ちょっとな、ここの学生に用があつてよ」

と中道は多少苦笑いになって言う。

「うちの学生にお前の世話になるような奴はいねえよ？」

式部は頬をポリポリと書いて中道に返した。

「ところがどっこい。いるんだよなあ、そういう変わったやつがよ

…… 伺去つてやつなんだけどよ」

返された中道はニコニコ笑いながら、それでいて歯を食いしばりながら言った。「あ、怒ってるな」と楽座は察した。

だが、式部の顔は険しい表情を浮かべていた。

「伺去？ 伺去祐依ならいねえぞ」

その式部の言葉に中道と楽座は「えっ？」と言つたような顔をした。驚きを隠せなかつたらしい。

「いねえ？ どういうことだ？」

「いねえもんはいねえって事だ。それにな、その伺去つて奴はお前がこの大学に入学する前に辞めてら……いや」

式部は眉間に皺を寄せて中道にこう言った。

「除籍扱いになつたんだ」

と。

中道と楽座はいよいよ訳が分からなくなった。依頼人は確かにこ



の大学に通っていた。だが、中道がこの大学に入る前に既に除籍されている。一体、何がどうなっているのだ。

「中道さん。これは一体どういうことでしょうか？」

楽座は中道のほうを見て疑問を投げかけたが、

「あたしにも分かんねえな」

と投げかけに対する答えはなかった。

「その話、もっと詳しく教えてくんねえか？」

中道は式部にそう言ったが、式部は苦笑いになり、

「わりいな、これから講義だ」

とすまなそうに言った。

「今日の講義は何時に終わる？」

「次の講義で終わりだ」

「じゃあ、大学近くの喫茶店で待ってつからよ。終わって一段落着いたら来てくんねえか？」

「いいぜ。何去についてはそこで話してやるよ」

式部は「じゃ」と言って、右手を上げて挨拶をした後、スタスタと歩いて行った。式部が去った後、中道は頭をバリバリと掻きまわった。

「ちつ。訳が分かんねえな」

「何去さん……一体何者なんでしょうかね？」

「それが分かったら苦労はしねえよ。何だよ、この間の事件といい今回の事件といい、訳の分かんねえ依頼ばかりじゃねえか」

中道と楽座はスリッパを下駄箱に戻し、自分のスニーカーを取り、履き替えた後校舎から出ようとした。だが。

ドアは閉まっていた。

「『開けゴマ』つつって開くような代物じゃねえよな」

と中道は困ったような顔を浮かべて、頭をポリポリと掻いた。

第四話・ショートエイジの時流（前書き）

ショートエイジ【Shortage】

・不足

#### 第四話：シヨートエイジの時流

「望清大学」の目の前を通る、車がやつとすれ違えるほどの広さの道を右方向に進む。右には大学の緑が見え、左には青々とした竹が生い茂る竹林が見える。大学を出てから歩いて二分。大正時代創業の呉服屋を改装したレトロで小さな「大正館<sup>たいしょうかん</sup>」という喫茶店がある。中へ入ると、落ち着く少し暗めの照明の明かりと、焙煎したコーヒー豆の心地よい香りが包み込む。

右側にカウンターがあり、五人掛けられる。そのうちの二席にはサラリーマン風の男性が座っている。左側には六人ぐらい掛けられるテーブル席が三つある。奥にも部屋があるようだが、電気は点いていない。柱や天井を格子状に張っている木がコーヒーの色をしている。柱には年代物　おそらく、昭和以前に作られたものだと思われる振り子時計が掛かっており、今でも時を刻んでおり、振り子がゆっくりと揺れる。椅子は木製であるが、クッションがしっかりとして、それでいてふかふかとしている。店内には曲名は分からないが、静かにジャズが流れている。

そんな長い時間居たくなるような喫茶店の入り口側から数えて二番目のテーブル席に、テーブルを挟んで向かい合うようにして中道と楽座が座っていた。既にコーヒーを頼んだらしく、二人の目の前には黒く輝くコーヒーの入ったカップが置かれている（中道も楽座もコーヒーはブラック派）。

「やつぱり、ここは落ち着くな」

中道は、天井や柱を見渡して懐かしむかのように呟いた。

「よく、ここには来てらっしゃったんですか？」

と楽座がコーヒーを一口飲んで聞く。

「ああ、ほぼ毎日……な？　マスター？」

と中道は厨房<sup>キッチン</sup>で他の客のコーヒーをサイフォンで入れていたマスターに振る。

「凜ちゃんが来るとね、常連さんたちが『待つてました』と言わんばかりに喜ぶんだよね。凜ちゃんの話は面白いから、聞きに来る人が多かったなあ」

「そういえば、来るの久しぶりだったな……卒業して以来かな？」  
しばらく、中道とマスターの談笑が続いた。楽座はそれを見て、久しぶりに微笑んだ。

意味不明な依頼が飛び込んでから、楽座はずっと悩んだ顔をしていた。色々なことが頭の中で混線状態になっていたからだ。この間の一件で「道楽遊戯」が関わっていた事が何処で洩れたのかは知らないが、あれ以来飛び込んでくる依頼の内容といえば、計画的殺人予告が送られてきただの、DVに困っているだの……。ほぼ、この二つに固定された物ばかりだった。そして、今回の依頼。本来の「お助け屋」の趣旨とは若干ずれてきている。いなくなった猫を探すのだって良い、町内のイベントで人が足りなくて困っているから手を貸して欲しいと言うのだって良い。そういう軽い悩みではなく、相当深刻な重い殺人や誘拐、暴力などの悩みが常に「道楽遊戯」に飛び込んでくるのだ。それに関して中道は特に気にしていないようだが……。

中道とマスターの笑い声が飛び交う中（カウンターに座っている男性客も、話を聞きながら笑っている）、突然、ドアが開き、吊るされているカウベル（牛の首に付けられている少し大きい鈴）が鳴った。

のっそりと入ってきたのは、白衣を着たままの式部だった。

「おや？ 先生、講義はもう終わりですか？」

マスターが入ってきた式部に聞く。

「ああ、今日は中道とデートだから」

と式部は「ははは」と笑いながら言った。それを聞いて中道は口に含んでいたコーヒーをそれはまた盛大に噴き出したのだった。おかげで楽座はそのコーヒーを頭に被ることになる。

「式部！ 何言ってるんだ！？」

と焦つて、自分のおしぼりで楽座のコーヒーで濡れた髪と顔を丁寧に拭きながら式部に言う。

「冗談だ、冗談」

と式部はカラカラと笑いながら言つて、楽座の隣に行き、「よっこらしよ」と言いながら座つた。そしてマスターに「炭火<sup>すみび</sup>コーヒーね」と言つて注文をしたあと、中道のほうに向き直した。

「んで？ 聞きたいことは何だつたっけ？」

と白衣のポケットに手をつ突っ込んでソフトパッケージの煙草とライターを取り出す。「チエリー」と書かれたソフトパッケージから煙草を一本取り出し、口に咥えライターで火を点ける。

「相変わらず、強い煙草吸つてんな」

と中道はつられるかのように、コーヒーカップの傍らに置いてあった、煙草の箱から煙草を取り出し、咥えて火をつける。中道は場所<sup>所</sup>で煙草を吸い分けている。普段は「ブラック・デビル」だが、お店で吸うときは「ラッキー・ストライク」と決めている。

「話をはぐらかすな。何を聞きたいんだと聞いているんだ」

式部が真面目な顔をして言う。楽座もいつの間にか煙草を吸い始めていた。黙々と漂う煙の中、少し沈黙が流れた。

ここで言つておきたいことが一つだけある。これは完全なる作者のミスなのだが、未成年者の喫煙は法律で禁止されている。楽座は喫煙をしているが、彼は十九歳だ。人に進められようが、興味を持つのが、二十歳を超えるまでは煙草と酒は我慢するべし。

「伺去祐依が一体何者かと言うことだ。さつき、式部は『伺去つて奴はいない』つて言つたよな？ ありやあ、一体どういう意味だ？」

中道が式部に問う。偶然にも式部の注文したコーヒーが到着したのと同時だった。式部は入れたての湯気がうっすらと立ち上るコーヒーを一口飲んでから、

「あの言葉の通りだ。『望清大』には伺去と言う名の学生はいない」と言つたあと、

「ま、今はな」

と付け足した。

「今は？」

楽座が不思議そうな顔をして式部を見る。中道はコーヒを一  
口飲んで、煙草を吸う。

「昔は居た。と言うような口ぶりだな？」

「まさにその通りだ。昔、お前が入学する前に居た学生だ」

「何年前に入学した？」

「今から八年前に入学して、その一年後に除籍じよせきになった」

「あたしが入学したのが六年前だから、あつたことねえのか……除  
籍理由は？」

「……」

中道の問いに無言でコーヒをすすする式部。カチャリとソーサー  
にカップを置いたあと、口を開いた。

「行方不明になっちまったからだ」

「行方不明になっちまったからだ？」

まるで鸚鵡のように式部の言ったことを繰り返す中道。楽座  
はメモ帳を取り出してメモをし始めていた。

情報収集は問題解決の最善策。

「何去が入学してから丁度一年ぐらい経つたときだ。全く、大学に  
現れなくなっちまったんだ」

「何故？」

「そこまでは知らねえよ。ある日、忽然と何去は大学から姿を消し  
た。俺は何去とはあまり話すことはなかったけどよ、さすがに気にな  
ったんで、よく何去がするんでた女学生に聞いてみたんだ。もし  
たら、興味深え話を聞いたんだ」

中道は式部の目を見て聞いていた。そして「それで？」と促す。

「『変な手紙が届いた』とかつってたらしい。その女学生 津村  
つつうんだがよ、そいつが何去から相談を受けてたそうだ」

「変な手紙？」

「ああ、津村が聞いた話だと、定規を当てながら一本一本線を引い

て書いたような字だったつてよ」

「……入学して一年経ってたつてことは……伺去が行方不明になつたのは四月か？」

「ああ」

「行方不明になつた日と除籍扱いになつた日、知つてつか？」

「行方不明になつた日は分からねえが、除籍扱いになつたのは今から七年前の四月二十二日だな」

七年前の四月二十二日。四月と言えば、伺去が誘拐犯に攫われることになつている日が四月十二日である。中道はコーヒーを一口飲んだあと、深く、何かを思い出すかのように考え始めた。煙草を吸い、口からプカリと煙を出す。そして、何か眠りから覚めたようにハツとすると、樂座を見て、

「陽ちゃん。四月十二日が火曜日なのは確か今から四年後の四月十二日と七年前の四月十二日だよな？」

と聞いた。

「ええ、その通りで……七年前の四月十二日……。伺去さんが除籍になつたのは四月二十二日……。まさか、中道さん」

樂座は少し青ざめた。まさかそんな事があるわけがない。もし、本当にそうなのだとしたら何故、今更こんな依頼を……？

中道はニヤリと笑つた。

「どうやら、あの子は相当面白い子なのかもしれないぜ。陽ちゃん」「いや、ありえないですよ。なんで今更、こんな依頼を？」

「さあ。本人に聞いてみたら一番早えけどな。何処にいるかさつぱりわかんねえからな」

中道と樂座のやり取りを見て、式部は少々興味深く、少々恐ろしく、少々不思議なことを言つた……いや、少々どころではないことを言つた。

「伺去祐依……もうちょっと早く、俺らが気付いていれば、今頃無事に就職してただろうし、もしかしたら結婚してたかも知れねえな」と。

楽座は頭がついていけなくなっていた。揺ら揺らとして焦点が合わない、そんな感じた。中道は中道でニヤリと笑って、何気に楽しんでるようだ。式部は凄く意味深な顔をしている。悲しそうな後悔の念が浮かび上がっているようなそんな表情。

「陽ちゃん？ 伺去は今、土ん中にいんのかも知れねえな」

中道はコーヒーを一口飲んで、再び「ラッキー・ストライク」に火をつけた。

ある一定時間、沈黙が保たれた。中道は確信づいたような顔を浮かべているが、楽座は頭が混乱していて喋る気にもなれないし、式部は伺去のことについてまだ後悔している風だった。

「マスター。コーヒーお変わり頂戴すまじ」

と、中道はふたたびコーヒーを注文した。その能天気さは一体何処から来るのだろうか。楽座に二つ目の疑問が生まれたと言う。



第五話・ポッシビリティの獲得（前書き）

ポッシビリティ【Possibility】

・可能性

## 第五話：ポッシビリティの獲得

中道と楽座は式部から伺去のことを聞いた。伺去は八年前に大学に入学し、僅か一年で除籍扱いになった。その理由は行方不明になったからだ。

伺去が除籍になったのは七年前の四月二十二日金曜日。その七年前と言うのは、伺去が「道楽遊戯」宛に送った手紙の中に記されていた「四月二十二日火曜日」という文に信憑性しんぴようせいが生まれることとなった。今年の四月十二日は木曜日。丁度、七年前と四年後の四月十二日が火曜日なのだ。妙な一致が重なり、伺去が行方不明になり除籍されたことと、伺去が「道楽遊戯」に送った手紙の関連性が非常に高いことから、手紙の内容はほぼ事実と言って良いと思える。

伺去が誘拐されたであろう七年前の四月十二日から除籍扱いになる四月二十二日まで十日間ある。しかし、この事について中道と楽座には、腑に落ちない点が二つあった。一つは伺去が行方不明になってから除籍されるまでの日数が僅か十日しかないこと。少々気が早いような気がする。警察には親が搜索願を出しているだろう。何年もの間、行方不明になっていれば除籍になることもある。しかし、十日経った時点で既に除籍になっていると言うことは、その間に何かあったと言うことだろう。そのことも中道は式部に聞き出そうとしたのだが、式部は口を閉ざしたまま何も答えなかったのだ。

もう一つの腑に落ちない点。伺去の元へ手紙が届いたとき、先生の誰一人として相談を受けていなかったこと。突然、「誘拐します」という手紙が来たのだから、担当教科の教員、教授には相談をすると思う。だが、式部を始め、大学の教員教授全員が伺去からの相談を受けていないと言う。当時、伺去が行方不明になったことについて式部は独自で調べてみたらしい。そのときに、伺去が教員教授には相談をしていなかったことが判明したのだと言う。

中道と楽座は原付を取りに行くため、式部と並んで大学の方へ歩

いていた。中道は腕を組み、上を向いて考えながら。楽座はメモ帳に書かれている文字を見ながら。式部は煙草を啜えながら遠くを見ながら歩いていた。柔らかな風が三人の間をすり抜けようとも、青々とした木々の葉がその風に揺れようとも、太陽の光がその木々の葉でやんわりとされようとも、心地よい気分にはならず、強く付きまとっている謎がねちっこく、しつこい気分させるだけだった。

「あ、そうだ。式部」

と突然思い出したかのように中道が言う。

「なんだ？」

少々ぼんやりしながら煙草の煙をモワツと吐いて反応する式部。

「伺去の実家の住所とかつてわかんねえか？」

「実家の住所？」

「伺去の個人情報を書いてある紙かなんかねえのか？」

「何時、警察が来て尋ねられてもいいように一応、とって置いてあるけどよ。そんな簡単に個人情報を流せるかつつの。今、個人情報保護法とかつてのがうるせえからよ」

「いや、こつちとしても一応、役所で「探偵」として認められているからよ。依頼遂行時の個人情報取得については聞き出せるとは思っただけどよ」

「なんだ、お前探偵だったのか」

「正確にはお助け屋だけだな」

「まあ、良い。分かった。伺去の住所と実家の住所を教えてやるよでも、伺去が住んでたアパートは今、別の人に渡ってつけどな」

そんなことを話しながら歩いていると、すぐに大学に着いた。三人は大学の敷地内を歩いていき、校舎へと入って行った。

式部を先頭にし、中道と楽座がその後を付いて行く。式部が向かった先は大学の昇降口を上がり、右に折れた突き当りにある事務室だった。生徒の個人情報等の書類は事務所で厳重に保管されている。「ちよつとここで待ってる」

と式部は中道と楽座に言うと言務室に入って行った。

「中道さん？」

と式部が事務室に入った後、久しぶりに口を開いた。

「どうした？ 陽ちゃん」

「なんか、調べが足りないと思いませんか？」

「どうしてそう思う？」

「質問の数が少ないと思ったんです」

「式部に聞いたのは除籍のことと交友関係……ぐらいか。それだけで十分じゃねえの？」

「俺が知りたいのは何去さんの容姿についてです」

「容姿？」

中道は楽座の言うことがよく分からなかった。今回の一件と容姿と何の関係あるのか。

「どういうことだ？」

「『道楽遊戯』に来たのが本当に何去さんなのかどうかですよ」

「つまり、『道楽遊戯』に来た何去さんは偽物かもしんねえって事か？」

「ええ。俺達は相談をしに何去さん来た時に初めてその容姿を見たんですよ？ それ以前に会った事すらないわけですから。あの何去さんが本人かどうかは分からないですよ？ 実際に本人かどうかは口頭でしか確認していませんし」

「確かにそうだな……まあ、大学に出す個人情報書類には写真を貼る決まりになってっつから、それを見りゃわかんだろ」

さすが【増分値】<sup>インクリメンタル</sup>。楽座の疑問が依頼遂行中で生じる盲点を確実に回収している。中道は逆に一回決めたら絶対に遂行したり、予想を予想とせず絶対にそうであると言い切れる【絶対値】<sup>アブソリュート</sup>。一見すると、楽座の方が優秀に思えるが、楽座にはまだまだ未熟な点が多い。楽座は依頼遂行中に生じる盲点を回収するが、依頼遂行中に生じる障害を越えられない。つまり、いざ誰かに襲われたときにどう回避したり、どう攻撃していいかが分かっていない。中道が【絶対値】を貫いているのは楽座の【増分値】を十分信頼してのことなのだ。

仮に楽座が居なくなつたとしても、中道は一人でもやっつけていけるだけのスキルは確実にある。実際、一時期一人でやっていたときもあった。もちろん、一人で複数の依頼をこなしていた。今、一件を集中的にこなしているのは楽座に問題解決の手順を叩き込ませるためである。楽座がある程度のスキルを持つたら、中道が一人でやっていたときのように、複数の依頼を同時に遂行するつもりでいる。しばらくすると、事務室から式部が茶色いA4サイズの封筒を片手に出てきた。しかし、その顔は納得のいかない顔をしている。式部はその封筒を中道に手渡した。

「おお、サンキュー……ってどうした？ 式部」

「ん？ ああ。おかしいんだよね……その書類」

「何が？」

そう言つて中道は封筒を開け中に入っている書類を開く。そこには何去の個人情報を書いてある。生年月日、血液型、現住所、実家の住所、学歴などが書かれている。

「おいおい……マジかよ」

中道は苦笑いをして現住所欄を見た。楽座が横からその住所欄を見る。

「あ……………」

楽座の顔が固まつた。見てはいけないものを見た。そんな感じだった。

そこには「某県某市灯宿町臨天 あかすくちちようりんてん 白波荘二〇三号室」と書かれていた。

灯宿町と言うのは広く、その灯宿町で細かく地区を分けている。臨天というのはその地区の一つである。

と、また絡んできたのが「白波荘」。あのアパートには何か因縁があると思えない。必ず、あのアパートに結びついてしまうという運命と言うか悪戯いたずらと言うか……………。

「お？ 白波荘って知ってんのか？」

と式部が書類を覗き込んで聞く。

「まあ、ちよつとな……にしても……ん？」

現住所欄から目を上に走らせる。「伺去祐依」と書かれた氏名欄の横に、証明写真を貼るスペースがある。本来ならここに本人の顔写真が貼ってあるはずなのだが、剥がした様な痕が残っている。接着剤とともに紙の表面がはがれたのだろう。穴は開いていないものの、破れた痕がある。

「式部、ここ……」

中道はその破れた痕を指差して、式部に聞く。式部はアメリカ人が「わからない」と言うときにするようなジエスチャーをし、首を横に振り。

「さあ、事務員の人にも聞いてみたんだが、全員心当たりがねえとよ」

と溜息混じりに言う。

「誰かが剥がしたんか？ もともとは貼ってあったみてえだ……」

……誰かが剥がしたんなら何かしらの理由があるはずだ」

「何か困るようなことでもあったんでしょうか？」

中道は楽座の方を見る。そして、

「ま、大方、『道楽遊戯』に來た伺去さんが偽者の可能性が馬鹿でかくなつたわけだな」

と言った。

「式部。これ、コピー取ってくんねえか？」

中道は書類を式部に渡そうと差し出した。

「いや、持ってつちまえよ」

しかし、式部はそう言う。

「いいのかよ？ 重要書類じゃねえのか？」

「顔写真が貼ってねえと、警察も信用しなくなっからな。ま、何かあつたら俺が責任取るからよ。心配すんな」

と式部はニヤリと笑って言う。

「へえ、随分と太っ腹な事言ってくれるじゃねえの」

と中道もニヤリと笑って、書類を封筒に仕舞いながら感心したよ

うに言う。

「それに、お前らならこの件について解決してくれると思ってからよ。信頼はしてんだぜ」

「そりゃあ、ありがてえな。じゃ、遠慮なく持ってくぜ。さてと…

…一旦帰るか、陽ちゃん」

中道が言うと、楽座はコクリと頷いた。

「じゃ、ありがとな。式部」

中道がそういうと、傍らの楽座がぺこりとお辞儀をした。中道と楽座が踵を返し、昇降口の方へ向かおうとしたその時、

「ああそつだ。中道」

と後ろで式部が声をかけた。

「あ？ なんだ？」

中道は首を後ろに向ける。

「氣い付けるよ。この一件、臭うぞ」

と式部は真面目な顔で言う。だが、中道は

「大丈夫だって。あたしらは『道楽遊戯』。ちょっとやそつこのことじゃ、くたばる様なオンボロじゃねえよ」

とニヤリと笑って言った。

第六話・サプリメントの断片（前書き）

サプリメント【supplement】

・補足



## 第六話：サプリメントの断片

「望清大学」を後にし、「道楽遊戯」に戻った中道と楽座だったが、結局のところ、分かったのはほんの少しの情報だけだった。一体、伺去祐依は何者なのか、果たして「道楽遊戯」に手紙を出し、中道に相談事を打ち明けたあの伺去祐依と名乗っていた女性は本当に伺去祐依なのか。

「ちよつと待て！」

中道は「道楽遊戯」に入っただけで、すぐに大声を出した。

「びつくりしたあ……どうしたんですか？ いきなり……」

楽座は目を大きくして、本当に吃驚した様子を見せた。

「あたしたち、伺去さんに会ってるんだよね？」

と中道は、楽座の方を見て問う。それに対し、楽座は「はい」と首肯うづうを交えて答えた。

「じゃあ、なんであたしたちは伺去さんの住所をそのときに訊きかなかったんだ？」

「それは、単なる訊きそびれじゃあ……」

「あたしたちは、依頼を聴く前に、依頼主から名前と生年月日、現住所を訊くだろう？ じゃあ、なんで住所を聞かなかった？」

「だから……ミスじゃあないんですか？」

「陽ちゃん。彼女の依頼のことについてはちゃんとメモ取ってるよな？」

「はい」

「そのメモに伺去さんの住所は？」

「えつと……書いてないですね……あ、生年月日もですね」

「なんか尋常うふじょうじゃねえな……こつも訊き忘れてあるもんなんか？」

「でも……いつも依頼者に訊いてることをその時だけ忘れるってことはほとんど……」

「ないよな？」

中道は、「うーん」と考え始めてしまった。何故、いつも仕事柄訊いていることを、そのときだけ忘れることなんてあるのだろうか。「中道さんらしくないミスですね」

「いや、実のことを言うと、伺去さんに会ったときのことを殆ど覚えてないんだわ」

「え？」

「陽ちゃん、伺去さんが『道楽遊戯』に来て、あたし達に依頼を申し込んだときのこと覚えてるか？」

楽座はしばらく沈黙した後。

「メモにはちゃんと訊いたことか答えは書いてあるんです……けど……彼女にあつたときは中道さんと同じく、あまり覚えていないんです」  
と言った。

「一体、どういうことだ？ 時間が一部欠落しているのか？ いや

記憶の欠落。どうしようもなくもどかしく、どうしようもなく歯痒く、どうしようもなく苛立たしい。

「伺去……一体、何者なん……」

だ。と言いかけた時、中道はふと事務所の隅のほうに置かれている、二人掛けのソファの下に目をやる。そして、ソファに近付いてしゃがみ込んだ。身を低くして下を覗き込み、おもむろに手を突っ込んだ。

「中道さん？」

楽座もソファに近付いた。何かを取ろうとしている中道を見て、少々不思議そうな顔をする。

中道はソファの下何かを掴み、手を引き抜いた。その手には小さいスプレー缶が握られていた。スプレー缶には何も書かれておらず、見るからに怪しげで毒々しいイメージがする。

「スプレー缶ですね……中身はなんでしょう？」

中道はスプレー缶の吹き出し口の臭いを嗅いだ。そして、ハッと

する。

「催眠スプレーだ。それも強いやつだ……軽く記憶障害を起こすくらい」

「催眠スプレー？ 一体誰が……？」

と楽座は驚いたように言った。そして「一体誰が？」と続ける。

「誰がつて……一人しかいねえだろうが」

中道はスプレー缶を見ながら、楽座に答える。楽座は何かを思い出したかのようにハツとして、

「伺去さん……」

と呟くように言った。

「でも、一体……何故？」

「そりゃあ あの伺去が伺去じゃねえってことだろうな。本物の伺去だったら催眠スプレーなんて必要ねえだろ？ 真剣な依頼をしに来たんだからわざわざ自分のことを隠す必要はねえしな。伺去が偽物だったからこそ、こんな物を使ってあたし達を惑わせたんだ」

「だから、住所と生年月日を聞き逃し……でも、待つてくださいよ。今までの質問形式は住所や生年月日を訊いた後、本題に入るじゃないですか？ 僕のメモには本題の方はちゃんと書いてありますよ？」

「あんな。本題つてのは手紙にも書いてあつたんだから、あらかじめ書いておくことも出来んだろ？」

「書いた記憶が……それに伺去さんの容姿については忘れてませんよ？」

「だから、書いた記憶が消えてんのはこの催眠スプレーのシヨックで忘れてるだけだろ。『伺去と名乗っていたやつ』の姿を覚えてるのは、あたし達の中で『伺去と名乗っていたやつ』を今、まさに探しているからだ。やらなきゃならねえことは一応記憶は少しだけど残つてんだよ。人間の脳みそ侮るんじやねえ」

「じゃあ、『伺去と名乗っていたやつ』は何故、伺去と名乗らなければならなかつたんです？」

「考えられることは二つ」

中道は、ドサツとソファーに腰掛けた。そして、続ける。

「一つは『佞去を誘拐しようとした、あるいは誘拐した人物』つまり『犯人』だったから。『犯人』がわざわざ依頼してくるのも変な話かも知れねえが、だいたい誘拐犯ってのは愉快犯だ。人が焦っているのを端から見て笑うような奴だ。今、あたし達が思い悩んでいるような状態を見て、汚く笑うのが好きなんだよ。『犯人』は『愉快犯』であり、『誘拐犯』であるという説。もう一つは『佞去がどうなったかを知りたがってる、佞去の友人や知人』。まあ、基本的にあたし達は『人探し』はしてねえ。受け付けてねえから、本人に成りすまして、依頼して。自分の素性を隠して、解決した後で何食わぬ顔でまたあたし達の前に姿を現せば、犯人を知ることが出来る。『人探し』はしてねえけど、『犯人探し』はしてるからな。そして、その犯人に詰問する。もちろん、死ぬ覚悟でな」

中道は、スプレー缶をポンポンと放り投げてはキャッチしながら言う。

「犯人か友人……」

「あるいはその両方ってのもあるけどな」

「はあ、と溜息を一つ吐いて中道は立ち上がった。そして「浴室」の方へと歩いていく。ドアノブに触れた瞬間、何かを思い出したかのように中道は楽座の方を顔だけ向いた。それを見て、楽座は少々吃驚したような反応をする。

「な、なんですか？」

「……」

何かを考えている様子の中道。顔はとても真剣だった。今までの事件のことを思い返しているのだろうか。そういう意識からか楽座の心臓は速くなって……。

「バスタオル用意してくれ」

ったのはまさに、「骨折り損」だった。中道はさっきの真剣な顔は一体なんだったんだろうかと言うくらいに満面の笑みを浮かべている。楽座は漫画のようなこけ方をした。

「おお、初めて見た。リアルでこけてるやつ」

「……」

笑う中道を尻目に、顔を真っ赤にさせた楽座が無言のまま体勢を直す。

以前の依頼と今回の依頼で、緊張感が続いたこともあり、楽座は心身ともに疲労していた。そのため、仕事でもミスを連発したり書類製作中に居眠りをしてしまったり、バイクで移動中に転んで大怪我をしたりした。そんな楽座を見て中道は何とか楽座の疲れを取ってあげたいと思っていた。中道はズボラでいい加減な性格と思われがちだが、やはり事務所の責任者でもあり雇用主でもあるから、それなりに従業員に対しては愛情を注いでいる。飲みに誘ったり、休日に遊びに行ったり。それに中道は美人である。リップまで黒いのは少々いただけないが、美人の元で働けて、なおかつ飲みに行ったり、遊びに行けるとするのは至れり尽くせりのように思う。逆に中道が疲れているときは楽座が中道を癒そうとする。だいたい、飲みに誘うことが多く、中道は疲労というものはどこに行っただといわんばかりに張り切り始める。環境的にも「道楽遊戯」というのは道楽であり遊戯である。

中道は「浴室」のドアノブをひねり、ガチャッと開けた。そこで中道の動きがピタリと止まった。それを見ていた楽座は中道の異変に気付いた。

「どうしましたか？」

「……ちよつと、こつち来てくれ」

楽座は少々疑問な面持ちで「浴室」の方に向かった。そして、中道の後ろに立ち中を除く。

「ッッ！！！」

楽座は目を大きく見開いた。そこにあつたもの。「浴室」にあつたもの。

「ぐうっっ」

楽座は口を手で押さえた。何かがこみ上げてきてしまったらしい。

そして奔って「給湯室」へと向った。

「陽ちゃん！？ 大丈夫か？」

「ぐええええええつっ！！！！！」

「給湯室」からは液体がシンクに叩かれる音と、楽座の辛苦しんくな呻き声が聞こえた。

「はあつ！ はあつ！」

あまりの苦しさに楽座は肩で息をしていた。胃の内容物を一気に外へと吐き出し、今見たものに対しての耐性を作るとともに、自らの体勢を直した。

楽座が吐くほどのものが「浴室」にあった。それは、ある程度の耐性が無いと楽座と同じようになるもの。《者》が《物》になったというそんな流れをはっきりと見せ付けられる瞬間が今、起こった。な、中道さん……」

青白い顔色をした楽座が「給湯室」から壁をたどりながら出てきた。

「陽ちゃん…… 大丈夫か？」

中道は大変心配そうに楽座を見て、肩を抱き、優しく楽座に声をかけた。

「こ……これは一体…… どういうことなのでしょう？」

「どうということ……それが分かったら、この話はオシマイなんだが……そういうわけには簡単に行きそうもねえな」

中道の言葉が終わるか終わらないくらいに「ふう……」と楽座は深い溜息を吐いた。

非常に疲れきっている楽座をソファに座らせ、自分の机の方に戻った中道は白い固定電話の受話器をとり、電話を掛け始めた。

「あ、恋春？ 中道だけだよ、ちと悪いんだけど面貸してくんねえかな？」

と話し始める。

「あ？ 違えよ。殺人だ殺人。この間みてえに報告しなかったら、てめえらまた五月蠅えからよ。律儀に報告してやってんじゃねえか

は？　なんでそんなに連れてくんだよ、少人数で頼むよ。この事務所の沽券に関わるからよ……ああ、頼むぜ」

簡単に話し終えて、ガチャリと受話器を置いた　と思ったら、また受話器をとり何処かへと電話を掛け始めた。しばらくして、

「お、慧けいか？　あたしだ。悪いんだけどさ、ちよつと面貸してくんねえ？　ちつと問題発生しちゃつてよ。これからサツが来るんだよ

は？　違えよ。何であたしが捕まんなきゃいけねえんよ？　ああ、そういうことだから、ちつと来てくれ　悪いな」

今度も簡単に話しを終えて、受話器を置いた。慧というのは中道の友人、榛葉慧しんばけいのことだ。

楽座を目で見てから続いて「浴室」のあるものを見る。その「浴室」にあるもの　楽座が吐くほどに残酷で気色の悪いそれ。「浴室」には本来あることはないのだが、それは「浴室」の床にごろりと転がっていた。それ自体は元々肌色なのだが、時間が経って白くなっている。元々全ては一つに繋がっており、「浴室」にあるような繋がりが全て途絶えた状態はないということ。それ自体、自分の意思で簡単に動かせるもの。

「浴室」には、人間の手、肩から肘ひじにかけての部分と、肘から手首にかけての部分、頭、腕と脚のない胴体こかんせつ。股関節ひざから膝にかけての部分と、膝から踝くるぶしにかけての部分、そして足。こんなこと細かに説明しなくとも、一言で済ませることも出来る。

人間のバラバラ死体だった。

第六話：サプリメントの断片（後書き）

2009年3月22日

「アードの断片」より改題。



第七話・フォービドゥンの道筋(前書き)

フォービドゥン【Forbidden】

・禁止

## 第七話：フォービドウンの道筋

今、「道楽遊戯」という事務所の「浴室」には、

「切り口に筋がいくつか出来てんのな……」

探偵事務所「道楽遊戯」の所長、中道凛と、

「随分と切り方が雑ですわね……大方、鋸で切断したんじゃないか？」

某県警琴原署捜査一課の警部、港南恋春と、

「骨が歪に砕けてっから、ハンマーかなんかでぶっ叩いて割ったみてえだな」

「各部の置き方も雑ですわね。ここまでするなんて、犯人は相当被害者に恨みを持っていたのかもしれないわね」

命を続かせることも、衣服を着用することも許されず、冷たい床に体の各部を乱雑に置かれた死体がいた。

同事務所所員の楽座陽太郎は、事務所内に置かれているソファで横になっている。先ほど死体を見たときに異常なまでの嘔吐をし、体調を少々崩している。おでこに濡らしたタオルを置かれ、目をつぶっている。「浴室」から聞こえてくる中道と港南の生々しい会話を聞いているだけで死体を思い出してしまい、何時吐いてもおかしくない状況だった。本当なら耳栓をしたいところだが、そこは何とか聞き流して抑えている。

その楽座が横たわっているソファと向かい合わせになるように置かれているもう一つのソファに、ストラップのついたカメラを首から提げ、濃紺の帽子を被り、同色の「鑑識班」と書かれている服を着た女性と、赤いツナギを着て、黒い髪を一本の三つ編みにしている、可愛らしい女の子と、上下黒いスーツを着た、肩よりも短いショートカットの髪の女性が座っていた。

「何年も集まっていますね、なんか変な感じがします」とカメラを持った女性が丁寧な口調で言う。彼女は琴原署鑑識班

班長、壬生木葉。

「久しぶりだね。全然連絡も取ってなかったし」

と続いて赤いツナギの女の子が言う。彼女はバイクガレージ「CUBE」を経営している、榛葉慧。

「うちは港南も壬生も同じ職場やから、会ってるけど、中道も榛葉もよう考えたら久しぶりやん」

と上下黒いスーツの女性が関西弁で言う。彼女は琴原署捜査一課刑事、出灰ゆかり。

どうやら、中道、港南、壬生、榛葉、出灰は面識があるようだ。

この間の事件で中道は榛葉のガレージ（兼自宅）で匿ってもらったことがあったので、そんなに長い間あっていなかったわけでもない。ただ警察関係者（特に殺人事件担当の課の人物）などは会うことは滅多に無い。普段も仕事で忙しいし、プライベートの時間もなかなか取れない。

「……みなさんは……以前に何かをされていたんですか？」

と、顔をげっそりとさせ、蒼白を浮かばせていた楽座がボソリと呟くかのように、小さな声で尋ねた。特定の人物ではなく、おそらくは壬生、榛葉、出灰の誰かに尋ねている。

「お、あんちゃん大丈夫か？ それにしても、あんちゃんもだらしがないなあ……。あんぐらいの死体見て、簡単にゲロつたらあかんやん」

と出灰は笑いながら言う。それを見て榛葉は、

「仕方ないよ。陽ちゃんはまだこの事務所に入ってそんなに経ってないんだもん。ね、陽ちゃん？」

と笑いながら言った。

「ゆかりさん、もうちょっとオブラートに包みましょうよ」

とフォローになっていない発言をする壬生……全く以って話がかみ合っていない。

「いや、あの……皆さんは前に何かグループかなんかを組んでいらっしやっただんですか？」

楽座はもう一度尋ねた。

「ん？ ああ、ごめんごめん。そいや、質問されとつたな。せや、うちら中学が一緒やってん。そんでその中学校で同じ部活に入ってるん」

「懐かしいね。言いだしつpegが凜ちゃんでさ」

「うふふふ。そうでしたね。部長は凜さんに即決定でしたね」

まるで同窓会に来ているような錯覚に陥った楽座がいた。

「しかも、『探偵部』っちゅう名前やったやん？ 高校受験の書類

にその部活名書くん、ちょ抵抗あつたもん」

「でもさ、結構事件解決したよね？」

「事件と言つても、『靴を隠された』とか、『弁当食べられた』とかつて可愛い物ばかりでしたよね？ 凜さん、『猪突猛進の中道』なんて変な呼ばれ方してましたし」

あはははと、笑い声も交えて盛り上がっている様子だったが、その話に今の楽座はついて行けるほどの余裕はなかった。ああ、もうちょっと抵抗力高めないとなあと心の中で呟いた。

「随分と盛り上がってんじゃねえか」

と、「浴室」から出てきた『猪突猛進の中道』がニヤニヤしながら三人の座っているソファに近付いた。

「『浴室』にいても聞こえてますわよ。休むのは結構ですけど、仕事はお忘れにならないでくださいね」

と中道と同じく「浴室」から出てきた港南も手を洗ったのか、手を白いハンカチで拭きながらソファに近付いた。

「あ、『頭脳明晰の港南』だ」

「ちょ……そんな古い呼び方で呼ばないで下さいます？ 恥ずかしいですわ。『隠密機動の榛葉』さん？」

『猪突猛進の中道』、『頭脳明晰の港南』、『隠密機動の榛葉』……他の二人の気がなるなあと楽座は思っていたとかいなかったとか。

「木葉ちゃんは……『最終兵器の壬生』だったっけ？」

榛葉は壬生のほうを見て、聞く。

「ああ、そういえばそうでしたね。懐かしいですねえ……」

「えと、ゆかりちゃんは……」

「うちは《隠滅解除の出灰》やったな。誰やねん。こんな二つ名付けたん」

「顧問の藤武ふじたけだったな、確か。っていうかよ……ある意味いじめだろ。これ」

「そうですね。結構酷いネーミングですね」

《猪突猛進》《頭腦明晰》《隠密機動》《隠滅解除》はなんとなく分かるが、壬生の《最終兵器》とは一体……。

少し話をして、中道は「コーヒー入れてくるわ」と言っつて、「給湯室」へと向っつていった。それでも、残りの四人は話を続ける。

「いつも、木葉が困になつとつてん。せやから藤武の奴が《最終兵器》なんて付けてん」

「すつごい、こじ付け感が否めませんでしたけどね」

死体があるのもすつかり忘れていような感じで、五人は談笑をしている。楽座は相変わらずソファーに横たわつたまま動かない。

中道は「給湯室」で入れ終わった自分と楽座の分を含め、六人分のコーヒーを持ってきた。そして、テーブルの上にコーヒーを乗せて来たトレーごと置いた。横たわつていいる楽座以外の五人は「いただきます」と言っつて、一つずつマグカップを取つた。

「それで、壬生さん？ 被害者の身元はお分かりになりましたの？」  
とコーヒーを一口飲んで、港南が突如として真面目な顔に切り替わり、壬生に尋ねた。

壬生は手に持つたマグカップをトレーの上に一旦置いて、濃紺の上着の胸ポケットから黒い手帳を取り出して開き、パラパラとページをめくつていった。そして、静かに、

「はい、警部。既に調べてあります。被害者は衣服の着用はありませんでしたが、何故か切断された胴体の下に免許証がありました。

それによると、名前は開地瑶子かいちようしさん。年齢は二十二歳。住所は明宿あかすくちよつりんとん

町臨天 白波莊しらなみそう一〇三号室です。ただ、遺体には頭部がありませんでしたので、これだけでは遺体が開地さんの物であるとは断定できません」

「そうですね。DNA鑑定をしてみないとわかりませんわね。それにしても、最近『白波莊』というアパートの名前、よく耳にしますわ」

と言う。その言葉に中道は飲んでいたコーヒーを思いっきり噴出した。近くにいた港南は本当に吃驚したようで、体をビクツとさせ

た。

「吃驚しましたわ。如何為さったのです？」

目を丸くした港南が中道に聞く。中道は噴出した拍子に顎へと伝ってしまったコーヒーを腕でグイッとぬぐって、

「いやあ、そのアパートとはなんか縁が深いなあっと思ってよ。なあ、陽ちゃん」

楽座は深い溜息をついた。またあのアパートか……。と、酷く落胆した。

「中道さん……」

楽座はかすかに聞こえるような声で言う。中道は「何だ？」と反応した。

「僕……この依頼から降りたいんですけど」

楽座がそういったあと、事務所内は非常に静かになった。ただ聞こえるのは壁に掛かっている時計の秒針音だけ。その場にいる全員が動かなかつた。時だけが流れる。

その静寂は、

「今……何つつた？」

と中道によって消された。

「降りたいといったんです」

と楽座が続く。

「理由は？」

「……」

「またもや沈黙。それは約20秒続いた。」

「……今までの依頼は、突き当たるといえば土か木で出来た壁でした。当たっても、すぐに壊れる脆い壁でした。ですが、今回の壁は土でもない木でもない、非常に固い壁。例えるなら銀行にある金庫のドアみたいな壁です。そんな壁をぶつ壊せる気がしません。しかも、また白波荘ですか？ あのアパートには行きたくもありませんし、見たくもありません。依頼人だってどんな人物なんだか、非常に透明な存在じゃないですか。僕はそんな依頼、もう進めたくありません。いつその事、迷宮入りしてしまえばいいのに……！」

三回目の沈黙。今回は1分。

「そんだけか？ 糞<sup>くそがき</sup>餓鬼……！」

低く、そして少し抑えた声で中道が言う。

「甘えるのもいい加減にしるよ、楽座。てめえがこの事務所に入った理由をあたしが忘れたと思ってるのか？ それとも、このあたしを裏切る気が」

中道は楽座に向けて指を指した。目は釣りあがっている。

「いずれにせよ、今のてめえには十分に頭を冷やしてもらおう必要があるようだな」

コーヒーの入ったマグカップをテーブルの上に叩きつけ、中道は横たわっている楽座の胸倉を掴んで、無理矢理起こした。楽座の体は力が抜け切っているのか、ちゃんと立てていない。

中道は左手を胸倉から離し、思いつき後ろに引いた。そして勢いよく楽座の右頬にパンチをめり込ませた。同時に中道が楽座の胸倉から右手を離したので、パンチの勢いで楽座の体は思いつき右へ傾き、ソファアームをはずれ、床に倒れる形になった。顔はうつむいている。中道は目だけ楽座のほうに向けた。

「出て行け」

と中道は倒れている楽座に吐き捨てた。

楽座は何も言わず、うつむいたまま立ち上がり、事務所のドアへと向っていき出て行った。ドアはこういうときだけしっかりと閉ま

る。

「……ええのんか？ 中道」

出灰が心配そうな顔で中道を見る。

「ま、アイツがこうなるのも無理ねえけど、ちっと頭冷やしてくんねえと、あたしが困る」

軽く溜息をついて、中道はドアを見る。開く様子はなかった。

楽座の机に置かれた今回の依頼に関する資料が、事務所の窓から入ってきた風でぱらぱらとめくれた。



第七話・フォービドウンの道筋（後書き）

関西弁が若干間違えているかもしれませんが、ご了承ください。

第八話：クロッシングの差異（前書き）

クロッシング【Crossing】

・行き違い

## 第八話：クロッシングの差異

「……………ちよつと待て！ 恋春。被害者のDNAを大至急調べてくれ！」

中道は風で飛ばされた今回の依頼の資料を見て、急に大きな声を出した。

「ごほつ……………いかがなさつたんです？」

港南は突然大きな声を出されたので、吃驚して口に含みかけたコーヒーを少しだけ噴き出してしまった。

「ふと思つたんだが、これ見てみる」

と中道は床に落ちた資料を手に取り、港南に見せた。それは何去が大学へ提出した個人情報の書かれている、いわゆる「学生証明書類」という物だった。

「血液型の合致ですか？」

と壬生が口を開いた。

「それと、DNAな」

中道はニヤリと笑つて言った。しかし、港南は溜息混じりに言った。

「中道さん。DNAの合致は何去さんのDNAが無いことには調べようがありませんわ。髪の毛とか皮膚の一部とかあれば話は別ですけど」

だが、中道は元々写真が貼つてあつたであろう証明写真貼り付け欄を指差して、

「ここをよく見てみ。これ、なあ〜んだ？」

と意地悪をするように言う。にやりと笑つたままなので、まさに意地悪をしているようだった。

港南は目を凝らして証明写真貼り付け欄を見た。

「中道さん、ちよつとこれお借りしますわ」

「どつぞ」

中道は港南に「学生証明書類」を渡した。

「壬生さん。大至急DNA鑑定をしてください」

と、港南は中道から渡された書類を壬生に渡す。壬生は書類を角から角へと眺めた。そして、証明写真貼り付け欄を見てハツとした。

「……分かりました」

壬生は資料を茶封筒に入れ、黒い皮製のカバンに仕舞ったと思うと立ち上がり、

「ご馳走様でした」

と言い、事務所を後にした。

「……それにしてもよく分かりましたわね」

と港南は感嘆した。

「あたしは視力だけはいいんだ」

中道は腰に手を当ててカラカラ笑って言った。それを見て榛葉が満面の笑みで、

「仲間思いのところもね、凜ちゃんのいいところなんだよ」

と言った。中道の笑い声が急に止まり、頭を掻きはじめた。

「……ったく、しょうがねえなあ。ちつと、留守番頼むぜ」

「私は一度署に戻らなくてはなりませんから、出灰さんと榛葉しんはさんに頼みましょう」

「ちよ、警部……うちも残るん？」

「命令です。残ってください。榛葉さんに何かあったらどうするんですか？」

「わ、わかりました」

いまいち納得していない出灰と、留守番する気満々の榛葉を残して、中道と港南は事務所を出た。

「行く宛はあるのですか？」

港南は中道に問う。

「あいつは必ずあそこにいる。間違いないよ」

中道は港南に言う。

二人は階段を下りて外に出た。相変わらずボロボロのビルが二人

の後ろに立っている。

そして、二人は互いに背を向けた。

「それでは……」

「またあとで……」

そう言つて、二人は別れた。

港南と別れてから……。

中道は「琴原駅」に向けて奔つていた。

黒い髪を靡かせて、疾風の如く奔る。通行人をうまく避け全速力で奔る。

あと少しで「琴原駅」に着くという所で、

ビリビリリリ。

携帯電話が鳴った途端、中道の足が止まった。携帯の画面を確認すると、そこには「最終兵器」と映し出されている。

「壬生か……」

中道はそう呟くと、電話に出た。

「どうした？」

全速力で奔っていたわりに、息も切らさず話す中道。

「あ、中道さんですか？ 私としたことが一つミスを犯してしました」

と受話器から申し訳なさそうに壬生の声が聞こえた。

「ミス？」

「はい、開地さんの免許証のことで」

「まさかとは思つが、作りモンってことはねえよな？」

「……」

沈黙。間。

「作りモンか」

「はい。それにしてもうまく出来てますよ」

「警察でも初見では気付かねえぐらいだもんな」

中道は皮肉を込めて言う。電話越しで相手の動作は確認できない

が、壬生は確実に肩を竦めているだろう。

「んで？ 写真は誰なんだ？」

「それは分かりません。現在調べているところです」

「DNAは？」

「それも今調査中です。すみません、色々至らなくて」

「ああ、ゆつくりやってくれや。あたしはあたしでやる事があるからよ」

「ニヤリと笑う中道。

「御武運を」

壬生は静かにそう言ったが、

「祈るほどのことじゃねえよ」

中道はケラケラ笑いながらそう言った。

楽座陽太郎は「白波荘」の前にいた。

いつ来ても、いつ見てもいやな建物だ。初めて見たときよりも雰囲気が悪くなっている。気分が悪くなってくる。気持ちが悪くなってくる。一刻も早く立ち去りたい。正直な話、直視したくない。

壁は白いのに血にまみれているように見え、窓はカーテンが閉めてあり中の様子は見えないのだが、窓際に誰か立っているように見える。

このアパートは建てられてからそんなに経っていない、新しいアパートある。立てられた当初は「望清大学」の学生で部屋は満杯になっていた。

しかし、「道楽遊戯」が解決した事件もそうだが、短い期間に何回か事件が起きており、それを境に入居者数は一気に減り、気付いてみれば全六部屋のアパートは三部屋ほどしか入居者がいない。

「開地瑤子」はこの「白波荘」に住んでいた女性だ。ここに来れば何か分かるかもしれない。そういう気持ちで楽座は「白波荘」の前にいる。

アパートはブロック塀に囲まれており、門は取り付けられていな

い。自由に敷地（といっても、建物と少しの庭しかなく狭い）へ出入りすることが出来る。防犯としてはあまりしっかりしていないようだ。犯人に「どうぞご自由にお入りください」と言っているようなものだ。

敷地内に入つてすぐのところ、二階への階段がある。その階段の上り口左側の壁に六つのポストが縦三列・横二列に並べて取り付けられている。左側は上から一〇一号室、一〇二号室、一〇三号室。右側は上から二〇一号室、二〇二号室、二〇三号室とポスト自体に白いマークで書かれている。大家が書いたのだろうか。

ポストの中央あたりにはネームプレートが取り付けられている。住人が自分の名前を書けるようになっていたが、ネームプレートはどのポストも真っ白。名前は書かれていない。

楽座はあるポストに目をやる。

左側一番下。

一〇三号室。

「開地瑤子」の住んでいた部屋。

楽座はあるポストに目をやる。

右側一番上。

二〇一号室。

「伏木可南子<sup>ふしぎかなし</sup>」と彼氏が住んでいた部屋。

「伏木可南子」が住む前に、「片里悠美<sup>かたさとゆうみ</sup>」という女性が住んでいた部屋。

そして、「片里悠美」が殺された部屋。

楽座はあるポストに目をやる。

左側一番上。

一〇一号室。

「片里悠美」を殺した「男」が住んでいた部屋。

「片里悠美」の「友達」が殺した「男」が発見された部屋。

おぞましかった。楽座は呆然と立ち尽くし、何も考えられなくな  
った。

だが、時折吹く強い風の中に……………。

中道は「久佐木駅」に着いた。急いで改札を出て左、「望清大学」  
のキャンパスの方へ向い奔り出す。

住宅街を奔り抜ける。線路沿いを全力疾走する。駅から約500  
mのところ、中道の奔っている道は、以前「ZOOMER」と「  
MAGNANO」で奔った道。久佐木街道と交差する。交差した  
ところで、右に折れる。「望清大学」は久佐木街道を北へ向かうと  
着くが、中道の目的は「望清大学」に行くことではなく、「白波荘」  
に行くことだ。「白波荘」も久佐木街道を北へ向かい、「望清大学  
南交差点」を右に折れれば到着だ。

相変わらず、速いスピードで久佐木街道を駆け抜けていく。息は  
全く乱れていない。乱れているのは髪と頭の中だった。

今回の事件は相当分厚い壁が立ちはだかっている。

意味不明の依頼。

正体不明の客人。

出所不明の死体。

心意不明の楽座。

全く整理がついていない。いや、色々ありすぎて整理できないの  
だ。中道にしては珍しいことなのだが、楽座がない以上いつまで  
経っても平行線のままだ。交わらない。交わらないということは解  
決することが出来ないということだ。絶対値の中道と相対値の楽座  
が交わることで始めて意味があるのだ。

正直な話、中道は「道楽遊戯」で発見した「開地瑶子」の死体が  
引つかかっているのだ。あの死体は誰なのか、何故「道楽遊戯」に  
遺棄したのか、何故犯人は偽の「開地瑶子」を殺したのか。頭の中



でループされる疑問。色々な考えを巡らすが決定打がない。

久佐木街道を走り始めてから1km奔ったところで、ようやく「望清大学南交差点」を眼に捉えられた。交差点を右に折れる。折れてすぐのところに「白波荘」はある。

だが、そこには誰もいなかった。

「……………いねえか」

息を切らす様子もなく、中道はゆっくりと周りを見渡した。だが、楽座の姿は何処にもなかった。辺りには「白波荘」の住人はもちろんのこと、近所の人すらいない。

「ここじゃねえとすると……………大学か？」

しかし、大学にはもう用はねえはず。と中道は乱れた髪を掻き揚げながら呟いた。

「ん？」

中道はふと何か落ちているのに気がついた。近付いてよく見てみる。

「こいつは……………」

その落ちているものを拾い上げ、

「おいおい、こりゃあ陽ちゃんの形見じゃねえか」

と言った。

“陽ちゃんの形見”それは 潰れた弾丸をピンバッジにしたものだった。

このピンバッジは楽座が常に付けているものだ。

「陽ちゃん……………何処に連れてかれた？」

中道はピンバッジを見つめて問いかける。しかし、何も帰っては来なかった。

ピリリリリ。

携帯が鳴る。中道は携帯をポケットから取り出し開く。

“最終兵器”

ピッ。

「どうした？」

「DNA鑑定の結果が出ました。事務所内に遺棄されていた『開地瑶子』の血液のDNAと伺去さんの『学生証明書類』に付着していた“睫毛”のDNAを照合してみましたところ……」

壬生は一息置いた。

中道は既にニヤリと笑っていた。

「合致しました」

「やっぱりな」

「どうやら「道楽遊戯」で死んでいたのは「開地瑶子」ではなく、「伺去祐依」の可能性があるようだ。

「まさか、書類に睫毛が付着しているとは、思いも寄りませんでした」

「ああ、だが 疑問が残る」

「ええ、誰が写真を剥がしたのか」

「依頼人は誰だったのか」

「開地瑶子とは何者なのか」

「楽座陽太郎は何処へ消えたのか」

「居なかつたのですか？」

「ああ、影も形もありやしねえ。誰かに連れてかれちゃったみてえだ」

「それでは捜査員を」

「待て」

「え？」

「犯人を刺激しちゃうかもしんねえから、いらねえわ」

「ですがっ！」

「お前にはもう一つやってもらいてえことがあんだよ」

「やってもらいたいこと？」

「『開地瑶子』が何者なのか調べてくれ。どうも気に喰わねえんだ」

「……わかりました」

よろしくな。と言い、中道は電話を切った。その直後。

ピリリリリ。

再び携帯が鳴った。

名前は表示されず、代わりに「公衆電話」の文字。

ピッ。

「てめえ、誰だ？」

中道は低い声で相手に言う。

「クククククク」

気味の悪い声で相手は笑う。そして、

「“ダテンシ”トデモ、ナノツテオコウカ」

と含み笑いで話しているのが分かるような、相手を小ばかにしているような喋り方で相手は名乗った。

墮天使。

「てめえだな？ 陽ちゃん連れてったの」

「ククク……『ラクザヨウタロウ』ハ、オレガコロシタ」

殺した。確かに相手はそう言った。

「殺しただと？ ふざけんのも大概にしるよ？」

中道の喋りには乱暴な口調と怒りが込められていた。

「てめえが永遠に灰色しか見られねえようにしてやんよ！」

中道はそう怒鳴ると、携帯電話の「切」のボタンを押し、通話を強制的に終了させた。

「壬生……なるべく早く調べてくれよ」

そう呟いて、中道は「白波荘」を後にした。

第九話・ディベロップの発展(前書き)

ディベロップ【Develop】

・進展

## 第九話：デイベロップの発展

「琴原駅」ことばらえきから市役所方面へ向う。歩いて十分、走れば五分弱。

そこには外装は既に変色したコンクリート。全体的に細い罅ひびが入り、大震災クラス地震が来れば確実に倒壊するであろう四階建てのボロビル「傘倉ビル」かまくらビル。通称、「傘ビル」がある。

そのビルに入ると目の前に階段（この階段も変色したコンクリートで所々欠けていたり、罅が入っている）がある。その階段を三階まで上り、すぐ左に曲がる。

「道楽遊戯」の事務所である。

中道なかみちは結局、「道楽遊戯」に戻ってきた。いや、戻らざるを得なかった。何も手がかりも確証もなく楽座らくざを探すのは非常に難しく、厳しい。「捜査員を出すな」と壬生みぶに言ったが、結局何も進展はなかった。

ただ「白波荘」にあったのは楽座が常に身に着けていた「潰れた弾丸のピンバッジ」だけだった。中道は事務所の中央に置かれた長椅子に腰を掛け、そのピンバッジを指で挟み持ち、ずっと眺めていた。

「なあ、中道。そのピンバッジって陽ちゃんのやんな」

と、出灰いすじはは事務所に帰ってきた中道が入れたコーヒーを一口飲み言う。

「ああ……」

中道の口から出たのは気の抜けた返事だった。そして、

「これ、陽ちゃんの親父さんの形見なんだよ」

と付け足した。

「親父さんの？」

「陽ちゃんの親父さんは刑事だ。いや、『元』刑事だな」

「元……？」

「ゆかり。楽座らくざ精介せいけいって名前聴いたことないか？」

「おお、知つとるよ。一課の敏腕刑事として有名な人やってんね。うち、一課に配属されたときに先輩から聞いてんねんけど、今でも写真が飾ってあるわ。たしか 『不倒翁の楽座』<sup>ふたうむのらくざ</sup> って呼ばれてたらしいな」

「殉職してるのは知ってるよな？」

「知つとるよ……五年前にあつた強殺事件で刺されてんね。先輩に聞いたわ。『楽座』なんて珍しい名前と思つとつたけど、まさか近くにいるとは思わんかつたね。」

「陽ちゃんの親父さんは『不倒翁の楽座』 楽座精介。その親父さんが常に懐に入れていたのがこの『弾丸』だ」

中道は弾丸を出灰に見せる。

「陽ちゃんに聞いた話だと、この弾丸は、親父さんが殉職する二年前にあつた、『望清大学生殺人事件』の犯人が撃つてきた弾なんだと。親父さんは腹にこの弾丸を喰らつちまって、手術で取り出した。それをずつと親父さんは自分への戒めとして持つてたんだつてよ」

「望清大学生殺人事件……今から、七年前なんね。結構近場での殺人やつたから印象に残つとるわ」

中道は長椅子から立ち上がり、自分の机の椅子に掛けられていた黒い革製のジャケットを出灰の横で眠っている榛葉<sup>しんは</sup>に掛けてやる。そして、動きが止まった。

「どないしたん？」

「ちよつと待て 望清大の学生が殺されたのが七年前だろ？」

「せや」

「伺去<sup>じやい</sup>さんが誘拐されたのが七年前 偶然にしちや出来すぎてる」

中道はゆっくりと、さつき自分が座っていた長椅子のほうに歩く。

「出灰、学生殺しは七年前のいつだ？」

「は？」

「学生殺しはいつだ？」

「そりゃ、帰つて見いんとわからんけど」

「調べてくんねえか？ ついでに参考までに言っておく。あたしん

とこの『依頼人』が誘拐されたのが七年前の四月二十二日だ」

「何かありそうやね」

「誘拐と殺しに強い接点があるような気がする」

「よっしゃ、おっけ」

出灰は立ち上がった。

中道は思い出したかのように、

「あと、現場がどこかも教えてくれ」

と出灰に言う。出灰は左手の親指を上げ、「ごっちゃん（ごちそうさま）」と言うと、事務所を出て行った。

中道は長椅子に腰を掛け、下を向き、頭をくしゃくしゃと掻いた。

「七年前。伺去祐依誘拐 望清大学生殺し」

中道はボソリと呟いた。

「伺去祐依 開地瑤子」

「……確か、殺されたのは津村つむらっていう学生だよ」

と、幼い女の子の声が出た。

「？」

中道が顔を上げると、榛葉は起きていた。先ほど掛けられていた黒い革のジャケットはいつの間にか中道の椅子に掛けられていた。

「起きてたのか」

中道は榛葉が動いていたのに全く気付いていなかった。それほどまでに集中していた わけではない。

「《隠密機動》ってわけか？ 別にここで発揮しなくてもいいんじゃないやねえ？」

「ま、確かにそうなんだけどね。すっごい集中してたし、邪魔するのも野暮だし」

榛葉はいつものような笑顔ではなく、とても真面目な顔をしていた。

「わりいな」

「いいよ。凜りんちゃんは常に動いてないと。私の出番が無くなっちゃうでしょ？」

と、榛葉はちょっといじけるように言った。中道はニヤリと笑って、

「出番は確実にあるぜ。慧けいにも調べてほしいことあるし」と言った。

「なに？」

俄かに榛葉が嬉しそうにした。

中道は榛葉に、

「と言った。」

榛葉はにつこりと笑って事務所を後にした。

コーヒーには全く手が付けられていなかった。

一方、琴原署鑑識課。

港南こうなんと壬生にっせいはそこにいた。

「……………なんで、私に聞かないんでしょう。あの人は」と、港南。

「恐らく、手が離せないと思ったんでしょう」

と、壬生。

「でも、良かったですわ。丁度、『開地瑶子』さんについて調べていたところですし」

「でも、警部？ 何故鑑識に？」

壬生の問いに少し呆れた表情を浮かべる港南。少し溜息をついて、「DNA鑑定の結果を聞きに来ましたの」

と言った。壬生は何かを思い出したかのような表情をした。

「あ、失礼しました。『道楽遊戯』内で発見された『開地瑶子』さんの死体のDNAと『学生証明書類』に付着していた『睫毛まつげ』のDNA及び血液型が一致しました ても」

「死体が誰の物かわからないということですね」

「ええ、現在死体のほうは検死に回されています」

「あの死体は『開地瑶子』さんではありませんわ」



「 どういうことですか？ 」

港南はA4サイズの茶封筒を開け、中に入っていた紙を取り出す。  
「開地瑤子さん。年齢は二十六歳、住所は京きょう豊ほう市し姜きょう仙せん区く台たい里り町ちやう巫なぎ。  
。ただ、現在はアメリカのコネチカット州ブリッジボードに住んでいますわ」

「海外生活ですか。移住か何かで？」

「いいえ。彼女は絵画の勉強をしていますが、度々日本に帰ってきていますわ。実は先ほど開地さんのご実家に電話をしたところ、今日、開地さんご本人がこちらに帰ってきていました。ご実家に行つて確認してきました。免許証の写真は間違いなく開地さんご本人のものでしたわ」

「開地さんは大学を出てらっしゃるんですかね？」

「ええ、でも『望清大学』ではなく、『望清大学』の近くにある『おつじびじゅつだいがく王地美術大学』の出身でしたわ」

「でも、何故、あの死体を開地さんのものにしたんですかね？」

港南は「うーん」と唸りながら、深く考えた。

「……犯人が適当に見繕った。あるいは犯人が開地さんに何らかの恨みがあつたとしか」

「いずれにせよ、あの死体が誰のものかを割り出されないうために犯人が別人と見せかけたということですね」

開地瑤子は生きている。

では一体、「道楽遊戯」にあつたバラバラ死体は一体誰のもので、置いたのは誰なのか。「道楽遊戯」に置いた理由。犯人は何故バラバラ死体が誰なのかを割り出されなくなつたのか。開地瑤子とする理由は何だつたのか。

「何も、他人を巻き込まなくてもいい気がしますけどね。それに、随分大掛かりな犯罪ですね」

「他人を巻き込まなくても犯罪はしてはいけないものですわ」

「それは人として当然のことですね。あ、警部。開地さんのこと凛さんに教えてあげてください」

「ええ、そうしますわ　ところで」

と港南は思い出したかのように言った。

「中道さんはいろんな人に調べ物をしてもらっているようですよ。さつき、出灰さんが急いで戻ってきましたけど。何を調べさせるんでしょう」

「聞かなかつたんですか？」

「なんだか、忙しそうでしたから。聞いてませんわ」

「凜さんは調べ物が苦手ですし」

「それは、ただ単に面倒なだけだと思いますわ」

「あはは……」

と壬生は笑ったかと思うと、俄かに顔が凍りついた。

「あ……」

港南は壬生の目線の先が気になり後ろを振り返る。

「……！」

目の前にニヤリと笑った中道の顔があった。

港南目線としてはどアップの中道の顔。

壬生目線としては不気味な笑みの中道。

「ういやああああああああああ　　っ！！」

咄嗟に港南の口をふさぐ壬生。だが、時は既に遅かった。回りの鑑識課員は一斉に中道たちのほうを見ている。

そして、全員人差し指を口元に当てていた。

「……ちよつと、一回ここを出ましよう」

顔を真っ赤にさせて、港南は鑑識課の部屋を足早に出て行った。

「あ、ちよつと待てよ。港南」

「え？　え？」

中道と壬生も港南を追いかけて、鑑識課の部屋を出た。

スタスタと前を早歩きで進む港南。

スタスタと後を早歩きで追う中道。

スタスタと後を早歩きで追う壬生。

警察署の長い廊下をどンドン進んで行く三人。

琴原署は上空から見下ろしてみると、I字形をしている。北から南へ伸びる細長い建物。

警察署の白い階段をどんどん下って行く三人。琴原署は五階建て。三階に鑑識課室がある。階段は一段がやや低く、年配の署員でも楽に上れる事を考慮している。

警察署の二階にある休憩室へと入っていく三人。

休憩室を入って奥へと進む。

休憩室の席は最小で二人席。最大で六人席がある。おそらく、ここで昼食を食べる署員が多いのだろう。席数は多い。一度に百人ほど座れるようだ。

休憩室の奥、隅にある四人席があり、そこに三人は腰を掛けたと同時に、

「一体何ですのどうして警察署内へ自由に入ってらっしゃるのですか急に後ろに立つたら吃驚びっくりしますわしかもあんな近くに立ってニヤリと笑っていたら誰でもあんな声出しますわよ心臓に悪すぎですわ」早口ですらすらと句読点くつてんも付けられないほど早く言う港南。

「どうやら、怒っているようだ。」

「ま、な。落ち着け。な？」

中道は港南をなだめようとする。が、

「全くあなたは中学のときからそんな感じでした人を吃驚させることが大好きでしたねまさか今でもそれが継続されているとは思いませんでしたわ心臓がまだドキドキしていますわかなり痛いですもの」

効果は無かったようだ。

「だーから」

中道は中腰になって、港南の頭を

「お」

ポスッ

「ち」

ポスッ

「っ」

ポスッ

「け」

ポスッ

と軽く叩いた。

「ふー、ふー」

一気に喋ったせいかな港南は少し息切れをしていた。四回叩かれて少々正気に戻ったようだ。

「あたしはあたしだそれに警察署には情報収集で世話になってるし大体の人間は顔見知りだあんな至近距離しきんきょりでお前の後ろに立っていたのはなんだか悪口っぽいのが聞こえてきたからだ吃驚させるのはあたしの趣味だ心臓が痛いのはあまり吃驚したり緊張したり運動しても鼓動こどうが速くならないお前だからこそなるんだ別に心配はいらねえよ」

と港南と同じように、句読点を入れられないほどに早口で港南の問に対しての答えをスラスラと言ってみせた。それにスピードが港南の早口の二倍ほど速い。

「もう、言うことはありませんわ。やっぱりあなたには敵いません。楽座君の姿が見えませんが？」

やっと落ち着いた港南、楽座がいないことにようやく気付いたようだ。

「結局、『白波荘』まで行ったんだけどよ、見つかなかったぜ」

「居なかつたのですか？」

「ああ、ただ陽ちゃんの形見だけが落ちてただけだ」

「他に当ては無かつたんですの？」

「ねえな」

三人は考え始めた。楽座が何処へ連れて行かれたのか。さまざまな場所を思い浮かべながら、その場所が今回の事件と関係があるのかを精査めいさする。ただ、今回の事件は「久佐木くさく」しか関係していない。「道楽遊戯」のある「琴原」近辺は今回の事件で関係している場所

はない。ほんの僅かな関わりとしては隣の市である「京豊市」。だが、その可能性はほぼゼロであると言って良い。

「久佐木」 「久佐木駅」近辺。「白波荘」も一応頭の中に入れて、関係している場所を挙げてみる。

「『望清大学』ですわね…… あ、開地さんのことお聞きになられましたか？」

「いいや、まだだが？」

「開地さんのことについて調べていたんですよ」と  
と港南は開地瑤子についての調査結果を中道に言った。

「……なるほどな、事件とは無関係な人間も巻き込まれちゃったのか」

ピリリリリリ

突如として携帯が鳴り出す。

港南と壬生は自分の携帯を確認する。

「あ、わりい。あたしだ」

中道は携帯を取り出し、画面を確認する。

《隠滅解除》 出灰だ。

「おう、何か分かったか？」

「中道？ ようやく分かったわ、七年前の殺しの日時と現場。被害者は津村由貴子（しむむらゆきこ）さん、当時19歳。死体が発見されたのが六月十日。ガイシャの死亡推定時刻はそれより三日前の六月七日午後七時半や。現場は『望清大学』の裏にある神社 『草岐神社（くさぎじんじや）』や」

「…… 伺去祐依が誘拐された後に殺されてんのか」

と、中道は相手に聞こえないくらい小さい声で呟く。

「出灰、津村さんの名前、『ゆきこ』だよな？ どう書く？」

「『理由ありの貴公子』」

「わりい、ありがとな。出灰」

ピッ。

名前の説明はあれで十分なのだろうか。

「出灰さんには何を調べてもらっていたんですの？」

「あ？ ああ、七年前にあつた望清大の学生が殺された事件だ」  
「それと、今回の一件何か関係があるんですか？」

中道は持つてきていた黒いリュックサックを開けると、中から黒いノートとペンを取り出した。さながら「デス ノート」みた……

「さーて、まとめてみつか！」

「何でちよつと棒読みなんですの？」

「いや、なんとなく」

中道はノートを開くと、上のほうから順番に書いていった。

伺去祐依しやうゆい 依頼人。七年前に誘拐予告の手紙が送付される。

津村由貴子 伺去の相談相手。七年前の伺去誘拐事件後に殺害

される。

式部武人しきへたけひと 望清大文学部哲学科准教授。津村に伺去から相談さ

れたといわれた。

開地瑤子 本件とは無関係。

#### 【七年前】

四月二日：伺去の元に誘拐予告の手紙が届く

四月十二日：伺去が誘拐される（行方不明になる）。

四月十二日から六月七日までの間：津村が式部に相談されたことを告げる。

四月二十二日：伺去が望清大学を除籍される。

六月七日：津村が殺される。

六月十日：津村の遺体が「草岐神社」で発見される。

六月二十日：楽座精介が何者かに撃たれる。

その後、誘拐事件の犯人も殺人事件の犯人も特定・逮捕されていない。

【現在】

六月十二日：「伺去祐依」から依頼の手紙が送られてくる。

同日（午前九時）：「伺去祐依」と名乗る人物が「道楽遊戯」に現れる。

同日（午後一時半）：「道楽遊戯」にて解体された死体が発見される。

同日（推定午後三時）：楽座陽太郎が何者かに連れ去られる。

「伺去祐依」と名乗る人物の顔を「道楽遊戯」所員が覚えていないのは、催眠スプレーによる軽度の記憶障害によるものである。

一通り書き終えると、中道はペンにキャップをし、テーブルにコトリと置く。

「よく、ここまで調べましたね」

「ほとんど調べてもらったんだけどな」

「でも、所々空白があることが気になりますわ」

特に現在の流れの下、異様に空白がある。

「ここは現在、《隠密機動》が調査中だ」

と中道はニヤリと笑って言う。

「……久しぶりに発動させちゃいましたか」

「ああ、そのうち《頭脳明晰》と《最終兵器》もな、発動させる予定だ」

「それ、本気で言ってるんですの？」

「半ばな」

ピリリリリ

再び、中道の携帯が鳴り響いた。  
中道は携帯を取り出して画面を見る。

そこには“公衆電話”と書かれていた。



## 第九話：ディベロップの発展（後書き）

### 《訂正情報》

【2009年3月28日】「津村由貴子殺害推定時刻」

本文中で日にち計算の誤りがありましたので、訂正します。

出灰が中道に報告した内容（望清大学生殺害事件に関すること）で、被害者の津村由貴子の遺体が発見されたのが六月十日、死亡推定時刻は六月七日となっています。

これを出灰が「一週間前」と言っていますが、これは誤りです。

正しくは「三日前」です。

訂正するとともに、お詫び申し上げます。

第十話・コネクションの直結（前書き）

コネクション【Connection】

- ・つながり
- ・関係
- ・結合

## 第十話：コネクションの直結

実際、喪失感そうしつかんと言うものはヒトのみならず、ありとあらゆる動植物に不安を植えつける物である。この先何が起るのか、この先何を見るのか、この先何を感じるのか。

ある日突然、存在と言うものが消える。その場所から居なくなる。消えてなくなる。本当に突然であり、偶然であり、必然である、自然でもある。時間の中で事細かに、かつ大胆。早くもあり、遅くもあり、速くもあり、遅くもある。心の準備はTPOなのでそこについては無視してもいいだろう。だが、少なからず故意があることには間違いない。そのもの自体が消えようと 居なくなるうとしてあるいはそのもの自体が消された 居なくなるようにさせられた自身から 他人が、あるいは第三者が。

喪失感と言うものを突然目の前に突きつけられた瞬間、動植物の反応は二極化される。探すか探さないか 見つけようとするか見つけようとしないか。それは関心 無関心、親類、友人 他人 人 そういう要素が大きく関わってくる。

関心があったり、親類や友人の場合は血眼になって探す。無くてはならない存在、消えては困る存在。利害得失、減益増損げんえきぞうそん、有意味 無関心だったり、他人だった場合はそのうち出てくるだろうという感覚、あるいは別に無くても困らない、消えたところで自分には損失も何も無い。無害無失。無益無損。無意味。

但し 例外。

突然であろうが、偶然だろうが、必然だろうが、自然だろうが、早かるうが、晩おそかるうが、速かるうが、遅かるうが、関心があっても、無関心であっても、親類でも、友人でも、他人でも、無くてはならない存在であっても、消えては困る存在であっても、無くては

困らない、消えたところで自分には損失が無いものであっても。

中道凜は動じない。

絶対と言うほど動じない。

絶対値は動かない。

何が何でも動じない。

冷静沈着自由主義。

「よう “道化師”」

中道は嘲る様にニヤリと笑いながら、相手 公衆電話から掛けてきている何者か との通話をスタートしていた。

「フフフ……ドウヤラ、楽座ノ居場所ガ分カラナクテ、才困リノヨウデスナ」

さぞかし慌てているかと思い、妙に明るい声で話す“道化師”。明らかにほくそ笑んでいるのがその口調から想像は容易だった。

中道が嘲笑しているのも、その相手の様子を想像してのことだった。

だが、その刹那。中道は一変して笑うのを止めた。

「……お前」

静かな口調で言う中道。無表情。

「毀して、壊して、乞わしてあげるわ」

妙に優しい口調。異様に優しい雰囲気、異常ともとれるまでに優しい中道の微笑み。中道は微笑んでいた。彼女の微笑みは何かを確

信したときやこれからの状況が楽しくなりそうなきだけ発動する。だが、この状況は違う。確信もしていなければ楽しくなりそうも無い。

その口調、雰囲気、微笑み。港南の顔には少々焦りの色が見えていた。それは壬生も同じだった。二人の背筋には悪寒おかんが走り、頭てうべんの天辺から足のつま先までを電気が走り抜けたような感覚だった。

そして、中道は電話を切って携帯の電源を切った。

完全なる強制通話終了。

完全なる強制通話拒否。

「な……中道さん……？」

港南の顔は青ざめていた。

「……スイッチ入っちゃいましたか……」

壬生の顔も青ざめていた。

今までになかった中道の口調と雰囲気と微笑み。これが何を意味するのか港南も壬生もよく分かっている。だからこそ、ここで直面したくなかった。いや、「ここで」ではなく永遠に直面したくなかったと言う方が完璧な答えだった。

「木葉ちゃん？ スイッチって何のことかな？」

中道は壬生のほうに顔だけ向き、優しく問いかける。

だが、それと同時に、

「港南警部！ 港南警部はいらっしゃいますでしょうか？」

と制服姿の男性警官がひよこつと休憩室に顔を覗かせた。いかにも警察学校をつい最近卒業しましたといわんばかりに、はきはきとして丁寧な口調で尋ねる。

俄かに港南がほっとしたのは言うまでもない。

「茅原巡査。いかがなさいました？」

余談だが、港南は琴原署に配属されている警察官の名前を全て覚えてる。

茅原巡査は困った顔をしていた。まるで警察署に勝手に子供が入ってきてしまったような、その子供の対処に困っているような。

「あの……赤いツナギを着た女の子が……」

と歯切れが悪い。言葉を選んでいるのに苦労しているようだ。頑張れ新米警官。

その言葉を聞いて、港南と壬生は顔を見合わせる。

「赤いツナギ？」

「女の子？」

「来たね」

中道は振りかえり、休憩室の入り口のほうを見た。

「「え？」」

港南と壬生も休憩室の入り口のほうを見る。

茅原巡査が休憩室に入ると、手を連れられて、それでいてふて腐れたような顔をしている赤いツナギの女の子も一緒に休憩室へと入った。

ふて腐れたような顔をした赤いツナギの女の子　榛葉慧だった。

「入り口をさーっと入ってきました……事情を聴こうと……捉まえましたら、『恋春ちゃんは何処？』……と聴かれました、迷子になったら大変だと思い……一緒に探しておりました……あ、申し訳ありません」

茅原巡査はただどしく説明をした。そして、最後に何故か謝った。おそらく、説明の中での「恋春ちゃん」という部分らしい。そこは気にしなくてもいいのではないだろうか？　情報を正確に伝えることは非常に重要である。頑張れ新米警官。

「ご心配ありがとうございます、茅原巡査。その方は私の同級生ですわ。ご苦労様でした。通常の勤務に戻ってください」

微笑んで茅原巡査に言う港南。

「同級生……し、失礼しましたっ！」

制帽をとり、榛葉と港南に深々と頭を下げる茅原巡査。

「いいよ……別に……」

何故か顔を赤らめている榛葉。

「それでは、し、失礼いたします」

ビシツと敬礼をきめて、休憩室から出て行く茅原巡查。榛葉はその後姿を何故か見送っていた。

「惚れちゃったのかな？ 慧ちゃん」

と少々意地悪っぽく言う中道　もはや、本当に中道であるかも怪しくなり始めている。

「……《速攻解決》じゃなくて《特攻壊滅》にスイッチ入ったの？ 凜ちゃん」

意地悪をされたことよりも、中道の変貌のほうに気を向けた榛葉。港南や壬生とは違って、非常に冷静である。

「慧ちゃん、よく私がここに居るって分かったね」

「なんとなくだよ。凜ちゃんの行動は読めるし」

普段の中道に話しかけているのと同じようにやり取りをしている。港南と壬生は、「これは『《隠密機動》の秘密能力』であると無理矢理頭に叩き込んでいる状態だ。

榛葉はツナギのポケットから紙を取り出した。それは、折られてはいるが、B5サイズほどの紙。そこに調査結果が書いてあるようだ。「まず、元『望清大学』文学部哲学科の津村由貴子さん。元々『久佐木駅』の二駅下りの『墟名駅』前のマンションに住んでいたんだけど、引越しをしている」

「引越し？ どこへ？」

「『白波荘の一〇三号室』」

「白波荘……一〇三号室……」

中道は何かを思い出そうとして目を瞑った。

「白波荘……あっ！」

港南は何かを思い出したらしく目を開けた。

「『開地瑤子』さんの免許証ですわね」

「ピンポーン。恋春ちゃんセイカイ！」

と楽しそうにパチパチと拍手を言う榛葉。

「でね、引越しをした一週間後に殺されてるんだよ」

と榛葉は調査結果の続きを読んだ。中道は顎に手を当て考え始め

る。

「津村さんが殺害されたのは六月七日。一週間前と言つと……六月一日。時系列的な関係はなさそうね」

「うん。無いみたいだね　ただ津村さんが式部准教授に相談したことと何か関係があるのかなつて」

「……式部ね……」

中道の中では何かが引つかかっていた。何故、津村が式部に相談をしたのか。それも何去がすでに除籍されているのにも関わらず。

「あ、もうひとつ」

と榛葉は思い出したかのように言った。

「この津村さんの殺害に関して、警察は、物取りの犯行じゃないとしてたんだけど、津村さんの持ち物から財布と部屋の鍵が盗まれてたよ」

「財布？」

「……免許証だね」

「はい、今度は凜ちゃんセイカイイ！」

榛葉は手をパチパチ叩いて言う。何故だ。この娘は非常にこの状態を楽しんでいるようにしか思えないのだが？

「よく、免許証を財布に入れてる人いるでしょ？　犯人は津村さんの財布を奪い取り、免許証を取り出した」

「それは、免許証を偽造するためですわね？」

「そ、んで、話は違うんだけど、『おうじびじゅつだいがく王地美術大学』の話。『王美大』の学長が前に話していたことで、一つ気になることがあつて、調べてみたんだよ」

榛葉は楽しそうに周りを見渡す。

「『王美大』の学長が話していたこと？」

「『美術には哲学に似るものは山とある』。だから『王美大』には哲学の講義があるんだって。でも、さ。『王美大』には哲学の先生はいないんだよね」

「ポイントは『望清大』と『王美大』の距離に有りつて？」



榛葉の言葉にすぐさま返答する中道。榛葉は少し驚いた様子で、「さすが、《特攻壊滅》。鋭いね『望清大』と『王美大』は目と鼻の先。哲学の講義は一週間に一回だけ。だから講師を雇うことをしなかった『王美大』側は『望清大』に講師の出張を願いだした」

「そして、『望清大』は快諾。一人の講師が『王美大』の哲学講師になった」

「その講師が……」

「『式部武人准教授』」

中道と榛葉のコラボレーションだった。うまい具合にハマっている。

中道、港南、壬生、榛葉。全員の思考は一直線になった。確実に犯人を見据えていた。

ただ、一つだけ分からないことがある。

「伺去さんって、一体何者なんですか？」

「そこらへんも泥濘ぬかり無しだよ。恋春ちゃん。伺去さんは伺去さんじゃないんだよ」

その言葉に港南と壬生の頭上には「？」がいくつか浮遊していたが、中道はニヤリと笑んだ。

「実は、式部准教授のことを調べているときに一人気になる人を見つけたんだよ。こっそり見つけて写真撮ってきたよ。そしたら、また調べているうちに凄いの見つけたよ。こっちも写真あるからねえ。そして、プラスアルファだったっ！」

榛葉はリズムカルに3枚の写真を横一列にテーブルへとたたきつけた。まるで取調べをしている熱血刑事よろしく、バシバコバスンとたたきつけた。

「3人ともよく似てますね」

写真を見た壬生がポツリと呟つぶやくように言った。

「ちょっと古い写真だけだし、左から副戸明衣子さん、副戸美和さ

ん、伺去祐依しやうゆいさんだよ」

「!?!」

港南と壬生は驚いたように写真を覗きこむ。確かに、明衣子と美和、そして伺去は3人ともよく似ていた。輪郭りんかくや目、鼻、口。髪形さえも似ていた。

「姉妹といわれても、皆信じてしまいそうですわ」

「ところで、伺去さんの写真はどこで手に入れたんです?」

「中学校の卒業アルバムだよ。伺去さんの出身中学校さえ分かれば、同級生の家に行って借りることだって出来るよ」

「……」

そこは盲点だった。とばかりに港南と壬生は顔を手で覆った。

「ただ、副戸美和さんは既に死んでる。自殺したんだよ」

「な……どうして?」

「さあ、私も調べたんだけど、そこまでは分からなかったよ」

突如としてガタツと音がした。中道が立ち上がったのだ。

「ふう……《特攻壊滅》一時解除……と。慧。分かったぜ。副戸美和、伺去祐依、津村由貴子が何で死んだのかがな」

「速いね、凜ちゃん」

「なに、そこまでヒントが出たら分かって当然だと思うけどね」

といいながら、中道は港南と壬生を見る。港南と壬生は中道を見たまま動じない。どうやら、呆気にとられているようだ。

「あと、陽ちゃんの居場所もなんとなく分かったぜ」

「なんとなくかようっ!」

榛葉に突っ込みを入れられた中道は、

「確信は出来ねえけど、多分あそこだな。んで、陽ちゃんはまだ生きてんぞ。多分だけどな」

「多分かよう!」

再び榛葉に突っ込まれた中道だったが、その顔は相変わらずニヤリと笑っている顔だった。

第十一話・リベレイトの介抱（前書き）

リベレイト【Liberate】

・解放

## 第十一話：リベレイトの介抱

好きだと伝えられなくても、その人のそばにいられるのであれば、とても幸せである。

だが、好きだと伝えて、その人のそばにいらなくなるのは、途<sup>と</sup>轍<sup>てつ</sup>もない不幸である。

また、迷惑掛けちゃったなあ……。

楽座陽太郎<sup>うらくざ たいたろう</sup>は心の中でそう呟いた。というか、先ほどしかそんな事しか思っていない。「早く助けに来ないかな」なんておこがましい事なんか一度たりとも思ったことはない。何気に楽座自身が好意を寄せている中道に対して、反抗的になってしまったのは死体を見ってしまったというショックが忠誠心に勝ってしまったからだ。それは楽座自身「自分が未熟だからだ」という答えには既に行き着いており、後悔の念しか今は無い。

楽座は「白波荘」に行き、そこで何者かに頭部を殴られて気絶させられた。気付いてみれば、目の前は真っ暗だった。目隠しをされているわけではなく、どこかの部屋に監禁されているようだった。暗がりの中で段々目が慣れてきたが、部屋は雨戸が閉められ、電気も消されているため、完全に真っ暗だった。その部屋の特徴さえも掴<sup>つか</sup>めなかった。手足も拘束されているので自由に動くことも出来ない。だから楽座は横たわったままの状態<sup>じょうたい</sup>で長い時間を過<sup>すご</sup>すしか出来なかった。

だが、分かったことがいくつもあった。

まず、ここがアパートの一室であるということ。先ほど、

「卯月<sup>うづき</sup>さくらん」

とノックとともに男性の声が聞こえたのだ。楽座のいる部屋のド

アがノックされたのではなく、隣の部屋のドアがノックされたようだ。しかも、一階であることも分かった。どうやら、男性はこのアパートの大家のようで、隣の住人から家賃を徴収していたらしい。会話を終えたあと何処かへと行ったようだが、その際、ジャリツと靴が土を鳴らした音が聞こえたのだ。

そして、そのアパートが「白波荘」であるということ。

隣の住人は若い女性で、大学生だということが分かった。そして、その大学が「望清大学」と言うことも分かった。

その女性は、今日（日を超えているかもしれないが、実際の時間は分からない）大学を休んだらしい。その女性の友達が彼女の部屋を訪ねてきたのだ。楽座は盗み聞きをするのは嫌いだが、自分の居場所を知るためには止むを得ないと思い、心の中で すみませんと呟いて、聞いていた。

「あ、朔良ちゃん。今日、大学休んだでしょ？」

「うん、ちよつと体の調子が悪くて」

「え？ 大丈夫？」

「あ、うん。もう大丈夫だよ」

「式部が朔良ちゃんを探してたよ」

「え？ ホント？ 明日、大学行くから、その時に式部先生の所に行くよ」

「ごめんね、体調悪いのに」

「ううん。もう大丈夫だから。わざわざありがとね」

「じゃあ、お大事にね」

「うん。有難う」

確かに、隣の住人（卯月朔良ウツキハルと言っらしい）とその友達は「式部」

という名前を言っていた。式部なんて珍しい苗字、早々聞くことも無い。

だが、これはあくまで楽座の考えだ。実際には少々食い違っている部分もある。

楽座の推理で分かったこと、「望清大学の近くにあるアパート・白波荘の一階にある部屋」、間違っではない。重要なことは間違っていない。確かに楽座は「望清大学の近くにあるアパート・白波荘の一階にある部屋」にいる。

ただ、隣の住人である卯月朔良と言う女性は「望清大学」の学生ではなく、「王地美術大学」の学生だ。以上戯言<sup>たわごと</sup>。

望清大学文学部哲学学科講師・式部武人准教授は非常勤講師扱いで、「王地美術大学」の哲学講義の講師を請け負っている。「望清大学」の学長や講師もこの式部の出張講義を賛成しており、式部自身も快諾<sup>たく</sup>している。

そのことを楽座は知らない。知っている訳が無い。知ることが出来ないのだ。言わずもがな、監禁されているから。

ただ、楽座の推理は確実に上達している。長いこと中道と行動を共にしているからなのかもしれないが、少ない情報からすぐに場所を特定するというのは「道楽遊戯」に入る当初に比べれば、雲泥<sup>うんでい</sup>の差だった。この楽座の素晴らしい推理を、是非とも中道に見せてやりたいものだ。まあ、無理な話だが……。

大きな音に対する反応と言うのは駭然<sup>がいぜん</sup>と安心とがある。

95%は駭然である。

残りの5%は安心である。

バンツツツツッ!!!!!!

というけたたましい音が聞こえた。

「陽ちゃん！ 居るか？」

聞きなれた声。懐かしい声。聞いたかった声。

楽座は安堵した。

靴のまま上がる中道。そして、楽座のいる部屋に近付き、ドアを開ける。

蹴破られた部屋のドアから外の光が差し込み、その光が暗かった部屋にも明かりを差す。中道の顔は逆光で見えないが、微笑んでいるようにも見える。ニヤリと。

「原点復帰だ、黄色い相対値」

「全ての軸は0でいいですか？ 黒い絶対値」

中道はニヤリと笑って、いる。楽座の元へと近付き、手と足を縛っている縄を解いていく。

「よく、ここが分かりましたね。中道さん」

久しぶりに声を出したからか、楽座の声は掠れている。

「お礼を言うなら、あたしだけじゃなくて『探偵部』の面々にも言えよ？」

「あはは……皆に迷惑掛けちゃいましたね」

「全くだ……この馬鹿が」

「誠心誠意、お礼を言わせていただきます」

楽座はそう言いながら、立ち上がるうとしたが憔悴しているからか、一瞬膝が落ちる。それを中道がすぐさま支えてやる。

「何にも食わせてもらってねえな？ 事務所までもつか？」

「ええ、もちますよ……事務所……帰っていいんですかね？」

「馬鹿。原点復帰つただろうが」

「……」

中道は楽座の頭をパスツと軽く叩いた。

「おめえがいねえんじゃあ、警告が出ちまうんだよ。可動限界超過だつってな」

「……」

「絶対値には相対値が必要だつってんだよ。んな恥ずかしい事言

わせんな」

中道は少しそつぽを向いたが、

「あははは……そうですね」

と相対値が笑いながら言うから、

「あはははは」

絶対値も笑った。

中道と楽座が部屋から外に出ると、そこには港南と壬生、榛葉がいた。三人とも笑顔だった。

「おかえりなさい」

と港南が、

「おかえりなさい」

と壬生が、

「おかえりー！」

と榛葉が、

「おかえり、陽ちゃん」

と中道が言う。

楽座は四人の顔を見る。なんて懐かしい顔なんだろう。長い年月を無駄にしたあのような気分だ。本当に懐かしい。

「ただいま 帰りました」

と楽座は静かにそう呟いた。

「さて、事務所に帰るか。壬生頼むわ」

壬生は中道にそう言われて、走ってアパートの入り口へと向った。アパートの入り口にはパトカーが止まっていた。いや、偽者じゃなくて本物の。ドラマでよく見るような、実際に公道を走っていて、悪いことをしていないのに、何故か身構えてしまふというあのパトカー。

壬生の走っていったほうへ、四人は歩き出す。中道は楽座を支えながら、港南は風で靡く髪を手でかき上げながら、榛葉は両手をポケットに突っ込んで足を大きく上げながら、四人は歩き出した。



アパートの入り口には中道たちが乗ってきたパトカーのほかに、二台ほど止まっていた。どうやら他の捜査員が乗ってきた車のようだ。だが、こちらのパトカーはツートーンカラーのパトカーではなく、見た目は普通のセダン。だがルーフに赤色灯がクルクルと回っている。いわゆる「覆面パトカー」と呼ばれるものだ。よく、「捜査一課」の刑事たちが乗り回しているのをよくドラマで見るが、実際はそんなに走っていないらしい。

捜査員や鑑識の人たちが一緒になって楽座の監禁されていた部屋に入っていく。その中に、出灰の姿もあった。出灰は港南に近付き、「警部。私たちはこれから捜査に入りますさかい、ここは任せて、凛<sup>りん</sup>たちを頼みます」

と言った。

「わかりましたわ。中道さんたちを送りましたら、またこちらに戻りますわ」

「警部、私も鑑識のほうがありますので、ここで失礼します」

「わかりましたわ。徹底的に捜査して下さい。すぐ戻ります」

「了解です」

壬生が敬礼をして、楽座の監禁されていた一〇三号室へと入っていく。

「では、行きましょうか」

中道が後部座席のドアを開けた。楽座をゆっくりと後部座席に座らせ、ドアを閉める。中道は反対側へと周り、ドアを開け榛葉を乗せた。そして、最後に自分が乗った。ボタンと閉められるドア。港南は運転席へと座った。そして、何事も無かったかのようにパトカーは走り出した。緊急走行で。

緊急走行だったので、予想以上の速さで「傘ビル」に着いた。赤信号スルーの力は大きい。

中道は車から降り、榛葉も降りた。今度は榛葉が反対側へと回り、ドアを開ける。

「あれ？」

と榛葉が妙な声を出した。

「どうした？」

「陽ちゃん、寝ちゃってるよ」

後部座席で、うな垂れて楽座は眠っていた。

「疲れてたんだらうよ」

シートベルトを外し、中道は楽座を背負った。相変わらず女性にしては力持ちである。「傘ビルの中へと入り、コンクリートの階段を一段一段、それでいて結構早く登っていく。

「おっと、慧。鍵取ってくれ」

「どこ？」

「ポケットだ」

榛葉は中道のボトムのポケットから鍵を取り出し、鍵穴へと刺した。

「どっち？」

「右だ」

榛葉は言われたとおりに右へ……

「あれ？」

と榛葉が再び妙な声を出した。

「どうした？ 慧」

「鍵が開いた感じがしないよ？」

「あ？」

中道は「鍵を閉め忘れたか？」と思っただが、確実に締めたことを思い出した。

「何で、開いてんだ？ 慧。わりいけどちょっと、ドア開けてくれ」

榛葉が「道楽遊戯」のドアを開ける。

ドアを開けて一番最初に目に入るのは、事務所の中央に置かれた長椅子だ。その長椅子に白い帽子、白いワンピースを着て、俯いている女性が座っていた。

「……誰だ？」

楽座を背負ったまま、「道楽遊戯」に入っていく中道とそのあとを榛葉が続く。

「てめえ、誰だ？」

「……」

中道の問いかけに対して無言のその女性。

「言わねえと、不法侵入でしょっ引いてもらっぞ」

「………」

中道に脅されて、聞こえるか聞こえないかの小さな声で俯いたまま名乗る女性。

「聞こえねえよ」

中道はその女性にもう一度名前を言うように催促した。

「……副戸明衣子」

静かにそう答える副戸。

「何故、ここにいる。鍵はどうした？」

中道は楽座を副戸が座っている長椅子と対面する長椅子に下ろし、横たわらせながら言った。

中道の問に対し、副戸はワンピースの胸ポケットから何かを取り出した。銀色の物。

「鍵………何で、おめえが持ってたんだ？」

「………」

副戸は依然として俯いたままだ。

「お前、依頼人『伺去祐依』としてここに来たな？」

「………」

副戸は無言で頷いた。

第十二話：イクスポージャーの回想（前書き）

イクスポージャー【Exposure】

・露見

## 第十二話：イクスポージャーの回想

中道は楽座を副戸の座っている長椅子と対面している長椅子に横たわらせたあと、副戸のそばに立った。腕は前で組まれている。

「お前は、誘拐犯から誘拐予告の手紙を貰った『佗去祐依』として、ここに依頼に来た。そして、四月十二日火曜日、午後五時十一分に誘拐されると、だからその誘拐犯をつきとめて欲しい。そう言っただけで自分の顔を覚られなくなかったんだろ？ あたしが住所とかを聞く前に、軽い記憶障害を起こすほどに強い催眠スプレーを使って、あたし達を気絶させた。お前は事務所の鍵を盗み、その場から立ち去った。厳密に言えば“死体を取りに行った”んだ」

「……」

副戸は中道の言葉に一切の反応も見せず、黙りこくっている。

「あたし達が『佗去祐依』にこの詳細を聞きに『望清大学』へ行くだろうということまで計算していたお前は、あたし達が出かけた後に、どこからか持って来た死体を洗面所に遺棄した」

「中道さん？」

中道の話の一区切りを見切り、楽座が聞く。中道は顔だけを楽座に向けた。

「お前、起きてたのか。無理すんな」

「いえ、一つ気になることがありますので。あの、バラバラ死体は『開地瑠子』さんのだったんですよね？」

「いや、違う」

「え？」

中道のはっきりとした否定に、楽座は素頓狂な声をあげた。

「あの死体は『開地瑠子』の物じゃあねえよ。あの死体は今までに名前の拳がっついていなかった、今回の事件に関係ある人物の死体だよ。本物の開地瑠子は健在だ」

中道はニヤリと笑って、楽座に言う。

「じゃあ、何で『開地瑶子』さんの死体だと偽装する必要があったんです？」

「ここは、こいつらの計算ミスが関わってくるんよ。『開地瑶子』という全く事件に関係ない人物を 殺す ことで、事件を錯乱させ真相を暴かせないようにしたんだ」

「なるほど……では、計算ミスというのは？」

「予想以上に早く『開地瑶子』ではないことが分かっちゃったことだ」

その中道の言葉に副戸は若干ビクツと反応した。だが無言のまま。『身元不明死体の照合というのはDNA鑑定、歯の治療痕、骨格、各部位の手術痕などを見るらしい。今回は頭がねえ死体だったから『歯の治療痕』の照合とはいかなかった。だが、たくさんある照合方法で『開地瑶子』ではないことが分かった。あの死体は『伺去祐依』『津村由貴子』と同じ大学に通っていた『日野杏奈』という女性だということが分かった」

「津村……由貴子、日野……杏奈」

聞いた事のない名前を二つ出された楽座は少々混乱していた。

「ああ、めんどくせえなあ！ 『津村』ってのは『伺去』が誘拐犯から手紙来たことを相談された奴。『日野』は『伺去』『津村』とつるんで、悪巧みをしていた奴だ」

「悪巧み？」

「ああ、それは副戸と『もう一人の人物』、そして死んだ『副戸の妹』も絡んでくる話だ」

この関係は「かなり」とは言わないものの、複雑な関係がある。

『伺去』、『津村』、『日野』が被害者になったというのは『副戸美和』が死んだことと大きな関係がある。『美和』も『伺去』達三人と同じ年、同じ学年である。

中道は顔を副戸の方へと向きなおした。

「お前と『もう一人の人物』は『伺去』『津村』『日野』の三人から脅されてたんだろ？」

やはり、副戸は何も反応せず、俯むすぶいたままだ。

「『津村』は七年前の六月に殺されている。『日野』が殺されたのはつい最近のことだ。おそらく、『日野』は『津村』が殺されたことで途轍とつとつもない恐怖心を感じたはずだ。『自分も殺されるんじゃないか』ってな。んで、脅おそしから一旦身を引いた」

「その……脅おそされた種たねって言うのは何なんですか？」

「そこらへん、お前が一番よく知ってるんじゃない？ 副戸」

中道は副戸に話をふる。依然として沈黙を保ち続けている。俄にわかに反応はするものの、絶対に口を開こうとはしない。

「いい加減かへんにしろ！！」

堪忍袋かんにんぶくろの緒おが切れたのか、中道はとうとう怒鳴った。右手を素早く殴るかのようにして副戸の被かつていた帽子を払いのけた。そして左手でガシツと副戸の頭を掴つかむと、強引に顔を前に向くようにして上げた。そして、中道は自分の顔を副戸の目の前まで持つていった。

「沈んで黙んな！ 黙って沈むな！ てめえのやったことはてめえでハッキリと喋りやがれ！ てめえは腹話術の人形か！ フィンガードールか！ あたしはそこまで多芸に飛んだ人間じゃねえよ！

物語の大半をあたしの喋りで終わらす気か！ 全てはてめえの勝手な行動の所為せいだろうが馬鹿ばか！ あたしはてめえに世話を焼くついで目を担になう気は全くねえよ！ てめえの世話ぐらいてめえでしやがれ！ てめえの罪はてめえで償つくえ！」

そう散々怒鳴ったあと、中道は右手で思いつきり副戸の左頬ほほを叩いた。パシーンと大きな音が事務所内に響いた。副戸は一瞬何が起こったかわからないようだった。

「驚きのあまりの無言。」

「てめえが一番よく知ってるだろうが。何でお前の妹が自殺しちゃまったのか。何でお前が三人に脅おそされたのか」

と中道は言つて、副戸の頭を掴んでいた左手を離す。副戸は驚いた表情をしていたが、次第に冷静な顔に戻った。だが、目は虚ろだ。

「全ては」  
と副戸は静かに話し始めた。

「美和ちゃん。貴方はお姉ちゃんと同じ大学に行つて、私の会社に入ればいいの」

そう言っているのは、明衣子と妹、美和の母親だった。

毎日のように、口癖くちぐせのように言っている。ただ、これだけで済めばまだ可愛いほうなのかもしれない。そのいつも言っていることの後には、必ず。

「もし、入れなかつたら 殺すから」

という言葉が入れられていた。美和にとって、それが一番のプレッシャーであった。プレッシャーでもあり、恐怖でもあった。何故、大学に入れなかつただけで殺されなければならないのだろう。美和は必死に勉強をしていた。だが、美和の成績は学校内ではトップクラスで簡単に明衣子の通っていた「望清大学ぼうせいだいがく」に合格できるだけの学力はあった。

「望清大学」は全国の大学の中で、五本の指に入るほどの名門校で三本の指でもいいほどだ。当然、そんなトップクラスの大学に入志願するのは全国の高校生の中でもやはりトップクラスの成績を収めている、いわば「天才」級の生徒でなければ、ほぼ門前払いと言つていいほど話にならないのだ。

「『望清大学』にも入れないなんて、うちの子じゃないわ。そんな子はいらないわ」

母親はそんなことも時折、零こぼしていた。

明衣子と美和の母親はともプライドが高く、自分の思い通りにならないとすぐに機嫌が悪くなる。すぐに手を上げる。いうなれば「短気」な性格。自分勝手、自意識過剰じこしきかじょう。それが祟たたつてか、父親は耐えかねてしまい、離婚してしまったのだ。父親は逃げるかのように海外へと去つて行った。おそらくはもう顔も見ること無いだろ



う。権力は全て母親にあった。母親が起業をして家庭内の全権を握ってしまっただけだ。父親は一般企業の社員に過ぎず、母親とは学力や収入面でも大きな差があり、母親には頭が上がりない存在になっ  
てしまった。母親はそんな父親をヘッドハンティングもせず、常に  
上から見下ろしていた。ヘッドハンティングしなかったのは、父親  
も大学に通っていたという経歴はあるものの、母親の通っていた大  
学とは雲泥の差といえるほどに学力の差があり、そんな父親を自分  
の会社に入れる訳には行かないと母親が判断したからだだった。父親  
はほぼ「乞食」のような存在になってしまっていた。

母親からのプレッシャーは美和にとって勉学の支障となっていた。  
見る見るうちに美和の学力は下がり、当然、成績も下がっていつ  
た。

このままでは、母親に殺されてしまう。

そう思った美和は、明衣子に相談した。

「このままじゃ、私……お母様に殺されてしまうわ」  
ある日の夜のこと。美和は明衣子の部屋を訪ねるなり、泣きなが  
らそう言った。

「私……お母様が恐くて……とてもじゃないけど、私『望清大学』  
に入れる自信が出ないわ」

「美和。落ち着いて。大丈夫よ。お母様の言うことは気にしては駄  
目。気にすればするほど、どんどん勉強が身に入らなくなるわよ」  
「でも……」

泣きじゃくる美和を見て、

この子は「望清大学」に入学できないかもしれない。

と明衣子は思った。美和の様子と実際の学力、どれをとって見て  
も不十分で不満だった。その原因は全て母親にあると思ったの  
だ。母親と美和を離す事が一番の改善策だが、それには美和に一人  
暮らしをさせるといふことしか思いつかなかった。しかし、あの母  
親が簡単に一人暮らしを認めるとは到底思えない。認めるどころか  
もっとプレッシャーを与えかねない状況になってしまいかもしれな

い。母親は本気だ。「望清大学」に入学できなかったら、例え実の子でも絶対に殺すだろう。口癖のようにあんなことを平然と言うのだから間違いない。

そして、明衣子は間違った判断をしてしまう。

この子を守るためには私が何とかしなければならぬ。

と判断したまでは正解だった。ただ、

この子の代わりに私が受験を受けよう。

と判断したところが大きな間違いだった。

明衣子もかなり焦<sup>あせ</sup>っていた。この時点で大学の受験までは日にちがなく、既に万策は尽き後戻りは出来ない状況だった。その焦りがこんな間違いをさせてしまったのだろう。

「この子の代わりに私が受験を受けよう」

いわゆる所謂、かえたま替玉受験と

いうやつだ。誰かの代わりに別の人物が受験をするという、違法的な手段。

「美和。よく聞いて。私が貴方の代わりに受験をするわ」

その言葉を聞いて、困った顔をして明衣子にすがりつく美和。眼からは止め処もなく涙が溢<sup>あふ</sup>れ、零れている。

「駄目よ。お姉様がそんなことをして、もしバレたりしたら……お姉様まで殺されてしまうわ」

「大丈夫。絶対にばれないようにする方法があるのよ。私に任せておいて。貴方は何食わぬ顔で受験当日、普通に家を出ればいい」

「でも、お姉様。受験当日はお姉様だってお仕事でしょう？ 私の代わりにするなんて出来っこないわ」

「私、貴方の受験当日。計画的な休暇<sup>きゅうか</sup>を取ってあるのよ。そこは心配要らないわ」

美和はとても不安そうな顔をしていた。それは当然だろう。本当にうまくいくという保障はどこにも無いのだから。

明衣子と美和の顔は瓜<sup>つひ</sup>二つ。まるで双子のようであった。それに背格好もよく似ており、母親の会社の社員もよく間違えるほどであった。だから、明衣子はこの話を美和に持ち出したのだ。

そして、受験日当日。試験場には美和はおらず、代わりに明衣子  
がいた。しっかりと、美和の制服を着て、何食わぬ顔をしてそこに  
いた。

一方の美和は私服姿で「望清大学」に居た。だが、もちろん試験  
場には居ない。美和は大学の見学と称して学校内を普通に歩いてい  
た。上空から見ればH型の「望清大学」。その「望清大学」の三階  
Hで言うところの右側の縦棒の下側。そこに一人の准教授じゅんきょうの部屋  
教員準備室があった。美和は準備室のドアをノックする。すると、  
中から一人の男性教員が出てきた。

「やあ、君が副戸の妹か。話は聞いているよ。早く入った入った」

そう言っつて、室内に招き入れる哲学科の准教授。

「ありがとうございます。式部准教授」

美和はそう言っつて、部屋の中へと入っつていった。

試験は滞りなく進み、明衣子は思う存分、自分の力を発揮した。  
そのおかげで無事に合格し、美和は「望清大学」に入学した。その  
結果に母親も大喜びだった。これで殺されなくて済む。美和は明衣  
子に感謝した。

ただ、全てがうまくいくわけではなかった。

そこから、美和は大きく崩れることになってしまふのだった。

第十三話：アンイージネスの憂鬱（前書き）

アンイージネス【Uneasiness】

- ・不安
- ・心配

### 第十三話：アンイージネスの憂鬱

植物は水を与えなくても生き延びるものもあれば、水を一日絶やただけですぐに枯れてしまうものもある。大体のものは水を一日絶やただけでは枯れず、ある程度生き延びるが、最終的には枯れてしまう。こまめに水をやることも大切だが、やりすぎると根が腐る。植物はとても繊細な生き物なのだ。

では、人間の場合はどうだろう。とある本によれば人間は一週間何も食べなくても生き延びるらしいが、それは個人差があるだろう。いや、そんなことはどうでもいいのだが、たとえば食べ物を与えずぎると人間は肥えていく。逆に食べ物を与えなければ人間は痩せていく。肥満になれば血液や臓器に支障が出てきて病に陥り、最悪死に至る。食べ物を食べなければ栄養が不足し、血液や臓器に支障が出てきて病に陥り、最悪餓死する。

与えすぎてもよくないし、与えなさすぎてもよくない。何事も限度とバランスが必要なのだ。

今例に挙げたのは人間の肉体に対する部分であるが、精神ではどうだろう。

悪い環境の中にいれば精神状態も悪化するだろう。あるいは慣れてしまい苦痛に感じなくなることもあるだろう。

良い環境の中にいれば精神状態も良好なのだろうか。あるいは慣れてしまい苦痛に感じてしまうこともあるだろう。

精神に関して、この時点では限度は関係ないといえるだろう。必要なのはバランスである。

ただそのバランスは人それぞれ違う。ある一定の力を与えただけでバランスを崩す人とバランスを崩さずにいられる人。むしろ、バランスの崩れそうな人を支えてあげるだけの余裕がある人もいる。しかし、そんな余裕のある人でも極端な力が与えられればバランスが崩れることもある。

つまり、人間は肉体的にも精神的にも限度とバランスが常に付き纏まとっているのだといえる。

「先生。これ拳銃じゃないですか！」

明衣子が美和の代わりに試験を受けている間、式部の部屋に匿かくまってもらっていた美和は式部の机に平然と置かれている拳銃を眼にした。木製の机に重圧的な拳銃はシックな色合いからか妙にマッチしている。

式部は部屋の中央に置かれた黒い皮製のソファ（応接用の物）に座り、新聞を読んでいた。ソファの前にはテーブルが置かれており、テーブルにはコーヒーの入った白いマグカップが二つと何本か捻り消された煙草たばこの入った灰皿が置かれている。式部は新聞を読みながら時折、コーヒーを口にし、煙草を吸っていた（大学内は禁煙だが講師の部屋は禁煙ではない）。

「ああ……」

と、短く返事をする式部。

「本物ですか？」

恐る恐る美和は拳銃を眺める。手には取らずに机に置いたままの状態で、まじまじとその重圧を見る。手に取るほどの勇氣は出なかった。

「コルトM1903。アメリカのコルト社が作った、セミオート式の拳銃だ。銃にしては小型で930gと軽量だ。」

「……はあ……」

美和は拳銃を見るのも初めてだし、もちろん拳銃の事なんか知るわけが無い。式部に今時分の目の前にある拳銃のことを説明されても、全く分からないし、また知ろうともしなかった。ただ、本物かどうかを知りたかったただけだった。

「これって、持ってちゃ拙ますいんじゃないですか？」

美和は拳銃を軽く人差し指で突いた。

「ああ、持つてることは確かに犯罪だ……別に、少し障ったくらいじゃ発砲はしないよ。メンテナンスを間違っちまうと、暴発すっけどな」

「えっ!？」

美和は式部にそう言われて、焦った。式部のメンテナンスが正しいかどうかまでは知らないが、そう言われてしまつと冷や汗が出るもし、暴発したらそれでこそ替玉受験よりも重大な事件になる。

だが、拳銃のこと以前に、既に美和は冷や汗を浮かばせている。この替玉受験が滞りなくかつ誰にもばれずに旨く行くかどうか。それが一番の心配だった。

「大丈夫だ。暴発はしねえよ」

「でも、何でこんな物を？」

「ああ、それはな……」

と言ったところで、式部は言葉を濁した。

「あ……すみません」

「あ？ 何がだ？」

「え？」

「銃を持っている。つまりは犯罪に手を染めようとしている。そういう解釈をしているようだな」

「……」

ずばり言い当てられた美和は言葉を見つけれなかった。

「そいつを持つてる時点で犯罪だがな、俺には持つてなきやいけねえ理由がある」

式部は読んでいた新聞を畳み、自分の隣に置いた。ソファからゆつくりと立ち上がり美和の傍までゆつくりと歩いていく。そして、自分の机に置かれたその銃をおもむろに手に取った。

「理由……ですか？」

「ああ」

式部は「ちょっと悪いな」と言つて、美和を少し退かせた。そし

て机についている引き出しの一番下にその銃をしまった。

「俺はそのうち殺される」

「？」

式部のあまりに唐突で、あまりに冗談のような理由に美和は無言で少し表情を曇らせた。

「命を……狙われてるんですか？」

「まあ、そんな大げさなもんじゃねえよ。俺はデューク東郷じゃあねえし、ましてやジェームズ・ボンドでもねえ……だがな、殺されるって気はしてんだよ。今、ちまたで有名な殺し屋がいつからよ」「殺し屋ですか？」

美和にしてみれば、ジェームズ・ボンドはギリギリ分かったが、デューク東郷は全く分からなかった。そして、殺し屋という、まるで小説に出てくるような、スパイなら他国にいつぱいいるかもしれないが、そんな殺し屋などという実際にいるかどうかも疑わしい存在に疑問符をたくさん頭の上に浮かばせた。

「ま、別にお前は知らなくても、生きていけることだからな。心配はいらねえよ」

「は……はあ」

式部とはそんな話をしていた美和だが、無事に「望清大学」への入学を果たした。美和は母親に殺されなくて済んだという解放と自分を入学させてくれた姉への感謝を抱いて、「望清大学」の校舎へと通った。当初、「望清大学」の近くにあった「メゾン・クサギ」というアパートに住み、そこから大学へ通うはずだったが、母親の猛反対にあい、しぶしぶ自宅から通うことにした。元々、そのアパートは明衣子が大学へ通っていたときに住んでいた。その時、母親は最初反対していたのだが最終的に許可を出し、明衣子はアパートから大学に通っていた。だが、母親は美和の申し出に対して、全く折れなかった。美和に対して、結構当たりが強かったりする。それは母親が望んでいた子ではなかったということが大きく影響



していたのだという。母親としてはやはり、自分の会社を継がせるのは男の子の方が良いと考えていた。明衣子が生まれたときは「次こそは男の子」と思っていたのだが、次に産まれた美和も女の子であったこと。エコーをとって見ても、性別がハッキリしていなかった。そんな赤ん坊に対して、必ず男の子であってほしいという思いで母親は出産に臨んだのだが、かなり厳しい難産で産んだ後母親は二度と子供を産めない体になってしまったのだ。そして、産まれてきた子供は女の子。この事で、母親は美和に辛く当たるようになってのだという。自分の意思で性別を決定したわけではないのに、随分と酷い仕打ちである。

美和が「望清大学」受験で苦悩していた時に明衣子に相談したことがあった。

「お母様は私のことが嫌いみたい」

と美和が零した。すると、明衣子は

「確かに、お母様はあなたのことが嫌いみたい」

とずばり言い放った。その言葉に美和の表情が凍りつく。だが、その表情もその後明衣子が言った言葉で明るさを取り戻したのだ。た。

「でも、私はあなたのこと大好きよ。お母様よりもあなたが好き」

母親には強く当たられていた美和だが、姉・明衣子や家に仕えている召使いから救いの手が差し延べられていた。美和がこの日まで生きてこれたのは母親のおかげではない。姉や召使いのおかげなのだ。

「お姉様……」

美和の目には涙が溢れんばかりに溜まっていた。

この姉妹は非常に仲が良い。顔は双子のように似ているが実際は双子ではない。しかし、お互いの気持ちは誰よりも深く知っている。ほぼ一心同体と言っても過言ではない。姉は妹を大切にし、妹は姉を敬う。この家は恵まれすぎている。それが苦境を生み出しているのだが、この家の姉妹は二人力を合わせて苦境を乗り越えてきたの

だ。もちろん、二人だけでは解決できないことも多々あったが、それは召使いの力も借りて突破してきた。

今までは。

この日までは。

この日が過ぎたあと、美和、明衣子に苦境では治まらない「地獄」がやってくる。

ある日のこと、美和は三時限目の講義を終え休憩に入っていた。四時限目は講義が入っていないため、昼食をとることにした。食堂は二階にある。三時限目は三階にある教室で行っていた為、美和は階段の方へと歩いて行った。

三階には休憩室がある。そんなに広くない自販機といくつか長椅子が置いてあるだけの本当に休憩するためだけのスペース（ちなみに禁煙）。階段の方へ行くにはその休憩室の前を通っていくことになる。

美和が休憩室の前を通り過ぎた時、ふと誰かの声がした。美和が立ち止まり休憩室の中を覗きこむとそこにはクラスメイトの伺去祐依、津村由貴子、日野杏奈がいた。三人で何か話をしているようだ。ただ、美和が通り過ぎようとした時に聞こえた「受験のとき」という言葉で美和の足が止まったのだった。

「なんかちよつと雰囲気が違うような気がするんだよね」

と言ったのは日野だ。

「副戸さんでしょ？ そんな感じはしなかったけど……」

少し考えるような仕草をして津村が言う。それに続いて伺去も言う。

「それ、他の子も言ってたけど、受験の時と比べてちよつと違和感があるんだって」

美和の体に少しだけ冷や汗が浮かんだ。まさか、替玉受験のことがばれた？

「もしかして、お姉さんか妹に替玉してもらったとか？」

と津村は少々驚いた口調で言う。

「でも、双子じゃないと顔も似ないし」

「聞いた話だと、副戸さんにはお姉さんがいるみたいよ。しかもすぐくそつくりなんだって」

「副戸さんって、『フクドコーポレーション』のお嬢様なのかな？」

三人の口から出てくる言葉は全体的を射ている。何処から出た情報なんだろう。誰から聞いた情報なんだろう。美和は青ざめ、体は冷や汗が流れる。いてもたってもいられなくなり、美和は気づかないように休憩室から離れていった。

二階に降り、食堂に行ってもあんな事を聞いてしまった後だから食欲が無い。少しだけでも何か食べようと思い、菓子パンを買ったが全く喉を通らなかった。それから何分かは椅子に座りうつむいたままだった。

封を開けてしまった菓子パンの袋を無理矢理縛り、トートバッグの中に入れて食堂を後にした美和は一階に降りて校舎を出た。校舎内の空気が何となく嫌になり、外の空気を吸いたくて外に出たのだが、かえってそれは良くなかったのかも知れない。

あの三人とばったり出くわしてしまったのだ。

三人は休憩室で話をしたあと、大学近くのコンビニへ行き昼食を買ってきたところだった。

「あ、副戸さん」

と日野に声をかけられる。そして、

「五時限目が終わったら、ちょっと話があるからさ、三階の休憩室に来てくれるかな？」

と言われた。

美和は「用事があるから、ごめんね」と言おうとしたが、言えなかった。口に出せなかった。逆に怪しまれるかもしれない。そう思った。美和は黙ったままコクリと頷いてしまった。

三人は校舎内に入っていく、美和は一人、ロータリーの様になっている校舎前の広場にあるベンチに座り、唇をかみ締めていた。

最終話・エピローグの終曲(前書き)

エピローグ【Epilogue】

・納め口上

・終曲

## 最終話：エピソードの終曲

全てはある一つの点から始まる。その一つの点を打ち付けるのはランダムだ。自分かもしれないし、友達かもしれない、親かもしれないし、兄弟かもしれない、はたまた赤の他人かもしれない。それでも、一つの点から必ず始まる。

では、終わりはどうだろうか。一つの点から始まった物事は、果たして一つの点で終わるだろうか。

それについての答えは 否である。

一つの点から始まった物事は、絶対に一つの点で終わるわけが無い。数え切れないほどの終点が存在する。それは始まりから終わりまででとった行動が総評価として結果が弾き出される。

最善から最悪まで

最高から最低まで

最長から最短まで

最下位から最高位まで

最初から最後まで

始点から終点までの中で様々な選択肢がある。それぞれ選ぶ物は違うし、全て同じ選択肢とは限らない。老若男女、喜怒哀楽、時々刻々 森羅万象の千差万別、多種多様の十人十色。例え、他の人と全く同じ条件で、全く同じ選択肢を選んだとしても導かれる答えは異なる。

相似ではないのだ、対称ではないのだ、イコールではないのだ。

全然違う答えが浮き出てくるからこそ、人生は楽しいのだ。

全然違う終点に導かれてしまうからこそ、人生は悲しいのだ。

楽しくて愉しく、悲しくて哀しい人生はそう簡単に捨てるものではないし、そう簡単に蔑ろにするものではない。始点から終点まで、生から死まで、おはようからおやすみまで……。

「それから、数日後に美和は死んだ……」

副戸明衣子は、

「遺書が……美和の部屋から見つかったの」

俯いて、声を震わせながら、言った。

「遺書？」

中道凜は、

「なんて書いてあったんだ？」

はつきりと、明衣子を見据えて、問う。

「簡単な遺書だったわ……単純すぎて怖いくらいだった」

明衣子は下を向いていた顔を上に向けた。目には溢れんばかりの涙が溜まっている。

「……“助けて、お姉ちゃん”って」

「“助けて”か。お前は本当に妹さんを助けられたんかね。面倒くせえや。そこにいるんだろ？ 式部。全て洗いざらい話してもらおうじゃねえか」

“道楽遊戯”のドアの方を向き、あたかもそこに人が立っているように中道が話しかけると、ドアが開いた。

そこにいたのは式部だった。

「副戸美和が伺去、津村、日野の三人に脅されていることを副戸明衣子に話したのは、てめえだな？」

「……」

「てめえも沈黙か。うんざりなんだよ！ てめえがしたこと罪深さを知らねえ奴が時間を無駄にするのがよ！ 人を三人も殺しておいてそれはねえんじゃねえか？」

中道は頭をガシガシと掻いた。

「わかんねえんだよな！ うじうじしたりとかすんのがよ！ ハッキリしやがれ！」

言い終わるか終わらないか、中道は机を脚で蹴った。鉄製の事務

机が「ドンツ！」という、爆発音にも似たすごい衝撃音を発した。

「……ああ、そうだよ。俺が明衣子に『美和が何去達三人に脅されている』と言うのを話したんだ」

式部は再び俯いた明衣子のほうを見て言った。

「ちっ」

と中道は舌打ちをし、

「まあ、これはもう分かってるけどな。副戸美和を脅していたという三人を殺した動機　あえて聞いてやるよ」

と言った。式部は「ふう」と溜息をついて、

「自分の地位のためだ」

と静かに言う。それを聞いて中道は「やっぱりな」という顔ををした。

「何故……殺さなければならなかったんです？」

楽座陽太郎らくざやうたろうはしばらく黙っていたが、どうしても我慢できなかつ

たようで式部に聞いた。

「……未来永劫えいじゅう、あいつらに脅され、自分の地位を剥奪はくだつされるのが怖かったんだよ……」

「そんなの……自分勝手じゃないですか？　明衣子さんだって、初めっからそんなことしなければこんなことには　」

「困っている人を助けただけだと思っっているよ」

「そんな……」

楽座の言うことは式部にとっては軽く返されるだけだった。呆れた中道が静かに口を開いた。

「地位を剥奪されるのが怖かった　困っている人を助けた　。

ま、確かにそうだろうな。沢山あった選択肢の中から最善の選択をしたと、そう思えるよな。結局、最悪の結果に終わったわけだがな。どこでこんな狂いが生じたか教えてやるうか？　副戸、式部。

それはな、てめえらの奥底に隠れる闇だよ。その闇はてめえらだけにあるもんじゃねえ。あたしだって、陽ちゃんだってそういう闇は持ってんだよ。だけどな、その闇を外に出ねえ様に封じ込めんのも





「なっ　！」

港南も出灰も酷く驚いた。

「前に式部本人から聞いたんだがな、混雑した電車に乗っていたら前に女　つまり、開地がいたんだと。片方の手はつり革、片方の手には本を持っていたらしいんだが、痴漢呼ばわりされたらしい。そのあと、鉄道警察で事情聴取だと。そのときに開地の名前を知っている調べたらしい」

「痴漢冤罪　最近多いようですね。鉄道警察の方でも手を焼いているそうですね」

「“向こう”に捜査員でも送れやええねん。なんかムカついてきたわ」

「ところで  
と港南は中道に。」

「この後、どうするおつもりなんですの？」

「は？」

突然、何を聞かれるかと思ったら、意外と普通のことだったので拍子抜けした中道。

「しらばつくれるおつもりですか？　あの四人がこっちへ帰ってくるらしいですね」

『あの四人』という言葉に中道はピクリと反応した。そして、チラッと楽座の方を見る。楽座は机に向かい、今回の事件のまとめをしていた。

「あの四人にはあたしでも逆らえないからな、特にあのリーダーにはな」

「付いていくおつもりなのですが、楽座君はどうするんです？」

「それなんだよな……あ、それと、お前ら。この事件まだ解決してねえぞ」

港南と出灰は顔を見合わせるが、二人の頭の上には疑問符が浮かんでいる。

「阿呆。“伺去”はどこ行ったんだよ」

「!？」

そういえば、津村（七年前の六月七日に殺害された）と日野（今年の六月十二日以前に殺害された）の死体は発見されているが、過去の安否が分かっているかない。

「そこらへんは式部が喋るだろ。お前らの腕の見せ所だぞ」

港南と出灰はコクリと頷いた。

「ところで　話は戻りますけど、楽座君はどうするんです？」

「まだ考えてねえよ。いずれ奴にも話すつもりだ」

中道と港南と出灰は楽座の方を向いた。何も知らずに仕事に集中している楽座。

「まあ、戻ってこれる日が来るんだったら、あいつとまた仕事するつもりだけどな……ただ、いつ戻ってこれんだかわかんねえ」

あらかた話しが終わったところで、港南と出灰は琴原署に戻って行った。

それから、何週間が経っただろう。

某県某市に「琴原駅」という駅がある。出入り口は一つしかない。その駅から出て市役所のほうを目指して歩いて行く。緑の美しい街路樹が日の光を心地よく遮る。車通りは多くもなく少なくもなく走り、路線バスも走っている。

「琴原駅」から歩いて約十分。新しいビルに挟まれて相当年期の入ったビルが見えてくる。所々に罅割れとシミがあり、ビルの看板は一文字だけ欠落してかつてそこに何の文字が掲げてあったのかわかるような痕がついている。このビル　「傘倉ビル」（一文字欠落しているから「傘ビル」と呼ばれている）は四階建て。ビルの入り口を入るとすぐにコンクリートの階段が目に入る。やはり、階段も所々に細い罅割れがある。上り始めたら崩れるんじゃないかなと思えるほどだ。

その階段を三階まで上り、すぐ左に折れる。すると、ビルと相まってボロボロな鉄製のドアがある。以前入っていた業者の看板が何度

も付けられては、剥がされているようで、接着剤の痕や無理矢理剥がした時に出来たと思われる塗装のはがれが目付いた。そんなドアには「道楽遊戯」というプラスチック製の看板は。無くなっていた。

傘ビルの前の駐車場には黄色い「ZOOMER」も黒い「MAGNA50」も置かれていない。

「道楽遊戯」は無くなっていた。

中道が反応した「あの四人」と何らかの関係があるらしいが、詳しいことは分かっていない。

中道は楽座にどういう話をしたのかは分からないが、相当シヨックを受けたと思える。メンタル的に少々弱い楽座は今、何をしているかは分からない。

ただ、最近「琴原駅」の近くに新しい事務所が出来たという話がある。

「西終六人組」という名前さいはてろくにんぐみの事務所で業務内容としては「道楽遊戯」に似たものがあるという話があるが、その真意は定かではない。そして、「琴原駅」近辺で中道に似た人物と楽座に似た人物を見る人が多いらしいが、中道に似た人物は髪が短く、青色で統一していたというし、楽座に似た人物も髪が短いのだが、ツンツンとした髪で銀色だという。他人の空似というか、雰囲気は似ているということだ。

「道楽遊戯」が抜けた傘ビルだが、元の郵便受けにはまだ依頼の手紙が入っている。だが、その手紙は毎日のように無くなっているという。だれかが捨てているのか、はたまた誰かが持ち去っているのか。

何だかすつきりしない。

「道楽遊戯」が戻ってくれば、もしかしたら解決するかもしれない。

中道と楽座の活躍で。

## 最終話・エピソードの終曲（後書き）

ご閲覧ありがとうございました。

ひとまず、「道楽遊戯シリーズ」はこれにて小休止に入ります。

という、逃げの一手を打って次の構想を練り始めることにします。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5000e/>

---

バッキングプレイング

2010年10月8日15時51分発行